

東アジア研究

East Asian Studies

32号
2024年3月

韓国男性の自己管理としての美容実践とスペック語り

— 動機の語彙を手掛かりに — 小平 沙紀

過去の留守児童経験の捉え方及びその影響

— 一人の日本在住元留守児童のライフストーリーを通して — 周 亜芸

映画の祭りは終わらない (下)

— アジアフォーカス・福岡国際映画祭の2006年から終わりまで — 八尋 義幸

2023年度 学会活動

東アジア学会

東アジア研究 第32号

目次 CONTENTS

〈論文〉

- 韓国男性の自己管理としての美容実践とスペック語り
—動機の語彙を手掛かりに— …………… 小平 沙紀 1
Beauty Practice of Korean Males as “Spec” Reflecting Self-Management: KOHIRA Saki
A Qualitative Analysis of the Theory of Vocabularies of Motive

〈研究ノート〉

- 過去の留守児童経験の捉え方及びその影響
—一人の日本在住元留守児童のライフストーリーを通して— …………… 周 亜芸 19
The Perceptions and Impact of Past Experiences as a Left-Behind Child: ZHOU Yayun
The Life Story of a Former Left-Behind Child Living in Japan

〈研究資料〉

- 映画の祭りは終わらない（下）
—アジアフォーカス・福岡国際映画祭の2006年から終わりまで— …… 八尋 義幸 37
The festival of movies will not ends: From 2006 to the End of YAHIRO Yoshiyuki
the Focus on Asia Fukuoka International Film Festival

〈活動報告〉

- 2023年度 学会活動 …………… 65
Year 2023 Activity Report

韓国男性の自己管理としての美容実践とスペック語り

— 動機の語彙を手掛かりに —

Beauty Practice of Korean Males as “Spec” Reflecting Self-Management:
A Qualitative Analysis of the Theory of Vocabularies of Motive

小平沙紀

KOHIRA Saki

Abstract

Beauty practice among men has become more common globally in the recent years, which can be observed in the annually expanding market for men’s cosmetics. In South Korea, the practice is not only limited to women but also among men; with South Korean men contributing to the highest global per capita sales of men’s cosmetics. Some studies had suggested that there is a correlation between the male-dominated norms such as Confucianism and military service to beauty practice and the high aesthetic consciousness among South Korean men.

This study attempts to analyze the generative structure of the high aesthetic consciousness of South Korean males by focusing on their subjective consciousness along the lines of the “Vocabularies of Motive” by Charles Wright Mills. Interview surveys were conducted to understand how South Korean males view their bodies and their beauty practices.

South Korean males showed a positive attitude towards beauty practices as it reflects one’s self-management ability. It is recognized as one of the “specs” (competitiveness) of a person. The active beauty practices of South Korean males are not merely the feminization and modification of masculinity, but is linked to and affirmed by their difficulty in finding employment and the neoliberalism trend of beauty. Moreover, it was identified that self-development was part of the national spirit taking root during the rapid economic growth in the 1960s.

This study suggests that South Korean men’s beauty practices that are not in conflict with the typically male-dominated norms, but strengthen their position in the South Korean social structure and history.

Keywords: South Korean male, beauty practice, self-management

要 旨

韓国は、国民一人あたりの美容整形件数世界第一位であり、美容産業の発達や美意識の高さは他国と比較しても突出して高いと言われる。また女性だけでなく男性の美容実践も活発で、男性用化粧品国民一人当たりの売上高は世界第一位を誇り、美容整形の男性患者も年々増加して

いる。本稿では、先行研究では見落とされていた、韓国男性たちの美容実践や外見に対する主観的意識に着目し、彼らがどのように美容実践をとらえ直して、具体的な行動に移すのかを明らかにしようと試みた。研究方法は、韓国男性たちの美容実践が生起する文脈や、身体への意識を把握することを目的としたインタビュー調査である。その上で、彼らの語る動機に焦点を当て、チャールズ・ライト・ミルズが提唱した「動機の語彙論」の知見に照らして考察をおこない、彼らが適切な根拠として使用する言語表現のレパートリーから、社会的文脈を理解しようと試みた。検討の結果、韓国男性たちが美容実践を「自己管理」であると認識し、外見を「スペック」とみなすことで実践が正当化されていく過程を確認した。こうした語られ方から、彼らの美容実践が単純に男性の女性化や男性性の変容を意味する行為ではなく、韓国における若者の就職難や、管理された美しさが価値とされる新自由主義的風潮、ひいては1960年代以降の急速な経済成長のなかで根付いていった、自己啓発を指向する国民精神を身体化していくプロセスでもありうることを明らかにできた。このように、本稿では韓国男性の美容実践は男性優位社会の規範に矛盾する行為ではなく、社会的構造や歴史を維持・強化する行為である可能性を示唆できたと考える。

キーワード：韓国男性、美容実践、自己管理、スペック

はじめに

身体構築の社会学的研究では、近代以降、フーコーの権力概念を参照した理想的な身体の獲得過程は、「自己への配慮」(Foucault 1976 = 1986)を通じた主体化のプロセスとして理解されてきた(原2010)。一方で、美容整形などの美容実践¹や美意識に関する研究は、西倉(2005)によると、フェミニズムの視座から女性身体を対象とし、男性中心社会が生み出す文化的言説による、女性身体の規律化と標準化に焦点を当て分析されてきた。しかし、伝統的性別役割が変化している現代社会では、男性の文化的・社会的不安定さにより男性性のゆらぎが生じ、男性においても、社会的・経済的利得の源泉として機能する、外見を含む性的魅力(Hakim 2011)の重要性は高まっている。それに伴い、男性の美容実践は世界的に活発化・一般化しており、男性身体に関する社会学的研究は喫緊の課題である。

このとき注目に値する事例として、現代韓国社会がある。その外見への強い関心や美容産業の発達 は世界的に突出しており、2015年には国際美容外科学会(ISAPS)の統計による人口1,000人当たりの美容整形件数が初めて世界第1位となった。また、韓国は儒教規範や義務兵役など歴史的に男性優位社会でありながら、それらと一見、矛盾するように男性の美意識が非常に高く、男性化粧品品の一人当たりの消費額は世界第1位であり、美容整形の男性患者も年々増加している。こうした男性の美意識は、メディアや美容産業の発達により一層促進されている。2000年代に入り、美容に関心を持つ都会的な男性である「メトロセクシュアル」(metrosexual)と呼ばれるスタイルが韓国にも流入し、ドラマやK-POPの流行とともに美男子を意味する「コンミナム」(꽃미남)などの新造語が生まれ、理想的

¹ 本稿では、スキンケア・化粧品・美容整形・ダイエットなど美容に関する行為の総称として使用する。

な男性像とされていった。同時に、男性化粧品市場は、従来の広告で強調されていた髭やマッチョなイメージを排除しながら拡大を始めた。とくに2010年代以降、美容に関心の高い男性を意味する「グルーミング族」(그루밍족)という語が社会的関心を集め、20～30代の男性を中心に能動的な美容実践が日常化していった(キム&ソ2019)。

韓国男性の美容実践に関する先行研究としては、美容実践と社会階層の分析や、外見が自己肯定感に及ぼす影響に着目した心理学的研究(キム&キム2021、アン2019)が豊富にある。一方で、それらの研究では、外見は競争力であるという認識が客観的事実とされ、韓国男性を一枚岩と見なす傾向にあり、彼らの生活感覚を切り結んだ主観的な語りに着目した事例は管見の限り見出されない。つまり、男性主義的な規範を有する韓国社会において、いまだ美容実践は女性的な行為であるという規範(イム2005)や、ルッキズム(外見差別)が問題視されるなかで、韓国男性たちはそれらの価値観と矛盾すると思われる美容実践を、どのように捉え直し具体的な行動に移すのかという、男性側の能動性についての議論が不在なのである。これらの問題意識より、本稿では韓国男性へのインタビュー調査から、美容実践や外見の語られ方に着目して分析を試みる。

I. 先行研究と本稿の分析視座

1. 美容にまつわる先行研究

美容整形や美容産業、美意識に対する議論は、従来、主に女性を対象に活発な議論が行われてきた(Fraser 2003)。そして、美容整形や美容実践に関する先行研究では、特にアイデンティティと身体との関係性について議論されてきた(Davis 2013)。そのなかでは、身体を変えることは個人による本当の自由選択ではないという見解が主流で(Featherstone & Turner 1991)、特にメディアの発達や消費社会の到来により、身体への社会的強制力や圧力が大きな影響を持つようになってきた現代においては、その文脈は複雑化している。

他方、その強制力に単に服従する一種の敗北感を払拭し、美容実践が実に主体的で正当で前向きであるという認識にさせる圧力もまた存在する。それは、メディアや美容産業、そして社会生活の中でのコミュニケーションである。そこでの相互作用は、行為に主体性や社会的意味を持たせることで、人々は自分の行為を正当化し、更にはそこに自身のアイデンティティを見出すことで、エンパワーメントしていく効果を持ちうるという見解もある(Gimlin 2012)。この自己啓発としての美容実践は、フーコーの統治概念の視座から多く説明されてきた。例えば、テ(2012)の研究では、女性たちが自己を測定し美を追求する、自己のテクノロジーを発揮して美容医療の合理的な消費者となり、近代における身体の統治の中で規範的身体を能動的に主体化していく過程を明らかにしている。とくに、美容整形による変身は自己啓発の劇的な装置となり、女性個人をエンパワーさせる側面がある一方で、女性を絶え間ない自己監視に従属させて女性間の競争的關係を作り出していくプロセスを、新自由主義的な統治性として分析している。

2. 男性身体に関する研究

近年は、女性だけでなく男性の美容実践も活発化しており、男性向け美容産業の拡大は韓国のみならず世界的な潮流である。そうした風潮と呼応するように、世界の男性向け化粧品市場は年々拡大しており、2031年までに市場規模は二倍になる見通しだ²。

男性の美容実践の既存研究はまだ蓄積が浅いが、2000年代に入りフェミニズムの波に影響を受けてジェンダー論から考察されるようになった。ここでは、国際化や性役割規範の変容により、男性に新たなアイデンティティの獲得が求められるなかで、女性的な慣習を取り込みながら新しい男性像を形成することで、アイデンティティを補完しているとされる。

韓国における既存研究でも、1990年代以降、性別役割に対する固定観念の変化と女性の社会進出により、男性性の変容に伴い求められる「男らしさ」が変化し、男性の外見は大きな社会的機能を持つようになったという議論が主流である（ソン2006；アン2019）。そして、外見を着飾り、労働よりも自身の生活を楽しむ、「女性的な」男性を体現するメトロセクシュアルという生活スタイルが、韓国男性にも徐々に影響をおよぼすなかで、理想の男性像は経済社会の環境変化に伴い、「力強い男性」から「美しい男性」へ変化していったと指摘されている（イ2013）。また、イム（2015）の調査では、外見差別の経験の有無や外見の重要性に対する認識にジェンダー差は認められず、いまや男性においても身体が社会的評価対象とされていることを明らかにしている。

しかし、これらの既存の分析では、国際化やメトロセクシュアルという他の国や地域も経験した事象からの説明に終始しており、世界的にみても突出して活発な韓国男性の美容実践を十分に分析しているとは言い難い。本稿では、統計データなど客観的数値に依存してきたためにブラックボックス化されてきた韓国男性の能動的な側面に着目して、帰納的な解釈を試みた。男性の活発な美容実践は、社会変化による男性性の変容という客観的条件によってのみ機械的に導かれるものではない。行為の生起とその展開の過程では、行為者による主観的な意味付与が決定的な役割を果たしているという点で、行為主体の意味世界を解明せずして、社会的現実の説明はありえないからである（鈴木2013：18-19）。

3. 本稿の課題と視座

本稿では、客観的条件と主観的意味世界がどのように結びついているかを考察するために、韓国男性たちへのインタビュー調査から、社会変化の帰結としての美容実践が、行為者によってどのように規範的な行為として正当化されているのか明らかにする。

韓国社会は、身体の毀傷や加工を忌避する儒教規範³や男性主義（マチズモ）を有する徴兵制など、本来は男性の美容実践とは矛盾する規範を有している。にもかかわらず、男性

² “Sales of global men’s grooming products to double by 2031” 20201.9.4 Premium Beauty News.

<https://www.premiumbeautynews.com/en/sales-of-global-men-s-grooming,18998>（最終閲覧日2023/12/14）

³ 儒教の教えの一つである「身体髪膚、之を父母に受く。敢て毀損せざるは、孝の始めなり」（栗原1986）という孝倫理を指す。

の美容実践がどのように適切な行為として選ばれ、さらに外見が価値とされているのかについて、行為主体である韓国男性の具体的な解釈から探求される必要がある。

本稿では、彼らの語る動機に焦点を当て、チャールズ・ライト・ミルズが提唱した「動機の語彙論」(Mills 1940)の知見に照らして、語られる動機から彼らが共有する物語を明らかにすることで、彼らの行為と社会背景の因果関係の説明を目指す。この「動機の語彙論」は、行為者が適切な根拠として使用する言語表現のレパートリーから、社会的行為を理解しようとするものである。ミルズ(1940=1971)は、人々が語る動機の本質的に社会的な側面に着目した。そして、動機を理解を通して、社会的行為の過程および結果を因果的に説明しようと試みたウェーバーの動機論を発展させ、行為者と観察者を含む聞き手との相互作用のなかでの動機付与において使用される語彙に注目した。つまり、動機に使用される特定の語彙には様々な型の社会的な統制が働いており、ある社会的な状況を象徴する「合言葉」(ミルズ1971:346)として、語彙の言語化された社会的機能を分析対象に据えた。こうした手法は、例えば犯罪など規範的秩序に反した行為において、ある動機の類型が用いられるメディア言説や社会的文脈など、特定の社会条件の解明に適している(鈴木2013)。

ミルズの理論から彼らの美容実践にアプローチすることの利点は、従来の規範と一見して矛盾した行為が、いかに再解釈され実践に至るのかという具体的な文脈を、身体が構成される言説的諸過程から説明できる点である。これは、日本で美容整形の研究を行ってきた谷本(2018)が指摘するように、「語られる動機が正当なものとして流布しうる社会背景に注目することでその行為の社会的文脈が明らかになる」(谷本2018:105)という点で、ミクロとマクロの視点をつなぐ包括的な分析が可能になると考える。

本稿では、調査で共通して聞かれた言語表現のレパートリーであり、韓国社会で身体への意味づけと深い関係があると考えられる、「管理」(관리、クァンリ)、「スペック」(스펙、スペック)という言葉に着目する。これは、韓国では美容実践を一般的に「外見管理」(외모관리)と呼び、外見を「自己管理」(자기관리)や競争力と結びつける傾向があるためである。後述するように、こうした言語を通じた解釈過程を、本稿では象徴的相互作用論に照らした上で、具体的な微視的視座として動機の語彙論を援用して、韓国男性たちの主観的意味世界を示す。以下では、韓国の自己管理概念の歴史背景と外見を巡る言説について概観する。

II. 韓国における外見への視座

1. 自己管理概念の背景

韓国では、一般的に美容実践を「外見管理」(외모관리)と呼ぶ。韓国語の「管理」(관리)は漢語由来の漢字語で、標準韓国語辞典によると、「物の維持・改善、人や身体の統制・世話」と定義され、現状の維持や向上のためのコントロールというニュアンスが強く、「肌管理」(피부관리)、「印象管理」(인상관리)など外見に対する意味合いも強い。こうし

た身体を管理の対象とみなす傾向は、韓国の近代国家形成の過程および新自由主義化における管理概念と関連していると考えられる。急速な高度経済成長と民主化を経た韓国は、1997年、IMF 通貨危機という経済の大きな転換点を迎える。そして、経済危機とともに発足した金大中政権下で、社会のあらゆる領域の新自由主義化と国際化が急速に進展していき、経済不安や就職難といった問題は、社会や国家ではなく個人の問題として還元され、個人間の競争は激化していった（パク2009）。新自由主義のもっとも中心的な論理は、自己がそれぞれを管理することであり、国民は自律的な自由主義的主体になることを求められるようになった。それは、地域や出自、階級や性の伝統的なつながりからより自由な、自己生産的なものと理解される。階級の足かせから自由になった新しい労働者には、自由な運命にたいする責任と、自らの自己管理が必要とされていった（Walkerline 2003 : 240）。

こうした競争と効率性中心の市場原理は、社会に浸透していくなかで、経済だけでなく、教育、家族、日常など多様な暮らしの領域で強調されるようになっていった。このような文脈から、既存のジェンダーや階級の不平等はより深刻化していき、個人は自由で多様な選択のなかで、自己啓発や自己管理の責任と義務を背負わされるようになった（パク2009 : 4）。このように、常に競争を求められる社会のなかで、身体は消費文化やメディアに取り込まれ、格好の自己管理の対象とされていったと考えることができる。

さらに、韓国では2000年代以降に、「ウェルビーイング」(well-being, 웰빙)と呼ばれる、健康的な人生や質の高い生活を志向する風潮が広まった。この風潮は、西洋の身体を対象としたコントロール観念 (Haiken 1997) と結びつき、新自由主義的風潮と相まって、管理された美しさが価値を持つようになっていったと考えられる。こうした背景に加えて、美容医療の産業化とその浸透によって、外見は可変的であり、医療の力を借りて管理することも個人の努力義務とされていったのではないだろうか。

2. スペックとしての外見

さらに、身体が自己管理概念に取り込まれるなかで、外見は管理能力を表す指標として競争力となっていった。韓国では、1997年のIMF 通貨危機を発端とした不景気や、新自由主義的な風潮の広まりから学歴インフレや賃金格差が広がり、若者の厳しい就職難が続いている。そのなかで、学力・学歴・資格などの就職活動における競争力となる要素を、韓国では一般的に「スペック」(스펙)と呼ぶ。近年では、顔も就職に必要なスペックであるという意味で、“Face”と“Spec”を合成した「フェイススペック」(페이스스펙)という新造語まで生まれた。このスペックは、従来、機械の性能・仕様を表す言葉である。筆者による韓国の新聞記事検索サイト BIGKinds⁴を用いた調査によると、90年代の新聞記事では、従来の意味通りパソコンの性能やゴルフ用品の仕様として使用されていたのに対し、2003年末からは、就職難に関する記事のなかで人に対して使用されるようになった。朝鮮日報2016

⁴ Big Kinds (<https://www.bigkinds.or.kr/>) は、一般日報、経済誌、地方日報などのビッグデータを取集した韓国最大の分析サービス

年12月1日号でも、韓国でスペックという単語が人に対して使われるようになったのは、2004年頃からであるとされている⁵。さらに、韓国報道財団の調査では、2013年からの5年間で、新聞や放送でもっとも多く登場した新造語がスペックであった。この背景には、若者の失業率が二桁に達するなかで、求職者が雇用市場で販売される商品として認識されている状況がある。このように、高学歴でも就職できない大卒失業者が増加し、競争が激化するなかで、面接で良い印象を与える外見も、一つのスペックと見なされるようになっていった。

上述の通り、韓国では2000年代に入り深刻な就職難が続いており、特に若年層の失業率が、1997年の経済危機以来、最低レベルを記録している。そうした深刻な就職難による過度な競争社会のなかで、身体を一つの競争力とする風潮も男性の美意識を高める要因であるとの指摘も多い(キム&キム2021)。学歴偏重社会とされる韓国では、IMF通貨危機から続く不安定な雇用環境により、韓国教育開発院の統計(2022年)⁶によると、大学進学率は73.7%と世界的にも非常に高い一方で、大卒の就職率は67.7%とOECD加盟国のなかでも低く、学歴による差別化だけでは熾烈な競争を生き残れない状況が生まれている。とくに、若年層失業率はOECD加盟国中最も高い水準で、韓国経済研究院(2021年)⁷によると、仕事も通学も休職もしていないいわゆる「ニート」のなかで、大卒若年層(25~34歳)の割合が20%と顕著に高く、その傾向は2010年代以降さらに深刻化している。

こうした深刻な状況と加速する競争は、通貨危機後に一気に韓国社会に流れ込んだ新自由主義によりもたらされ、構造的な不平等や格差は個人の努力や能力の問題へと回収されるなかで、自己啓発や自己革新の主体形成が求められるようになった(パク2009)。そして、誰もが努力して投資すれば得られる外見の美しさも、競争力とされる社会的風潮が生まれた。とくに、採用時の外見差別は男女ともに問題化しており、政府は2007年改正の男女雇用機会均等法の女性に対する採用時の外見差別禁止要綱を2021年に改訂し、男性を含む全ての労働者に対象を拡大する施策を講じてきた。さらに、美容産業の商業化や美容医療の発達により、外見が先天的なものから努力で変えることのできる後天的なものへと認識されるようになり、外見は本人の自己管理能力や努力の度合いを示すようになった。そして、「外見もスペックだ」という言説はより説得力を持ち、先天的な外見の差異による不平等を是正するための美容実践は、正当な行為であると認識されるようになったと考えられる。

⁵ “[이슈 모아Zoom] '조기·명태' 부터 '흙수저' 까지, 시대별 신조어” 조선일보 2016. 12. 1 https://www.chosun.com/site/data/html_dir/2016/11/22/2016112201838.html (原文韓国語) (最終閲覧日 2023/12/14)

⁶ 韓国教育開発院「2021高等教育機関卒業生就職統計年報」(2022年12月31日公開) <https://www.kedi.re.kr/khome/main/research/listPubForm.do> (最終閲覧日2023/12/14)

⁷ 韓国経済研究院「OECD教育指標：水準別25~34歳人口の失業率、非経済活動比率の推移(2019, 2020)」https://kess.kedi.re.kr/publ/publFile?survSeq=2021&menuSeq=3648&publSeq=19&menuCd=91041&menuId=1_3_3&itemCode=02&language=en (最終閲覧日2023/12/14)

3. 管理概念・スペック語りの淵源としての朴正熙時代（1963年～1979年）

さらに興味深いのは、こうした新自由主義的な管理概念やスペック言説には、1960年代以降の近代国家形成と急激な経済発展下で、韓国男性に課せられた労働力としての国民理念と通底する構造が見出されるということである。イ（2017）によると、朴正熙政権が推し進めた工業化と経済成長において、男性たちは企業の管理システムに組み込まれ、出世を人生の成功とみなす競争原理と能力主義の広まりのなかで、生き残るための自己啓発を余儀なくされた。さらに、男性の出世は家庭内の性別分業に支えられ、妻が夫の自己啓発を管理するという、家父長的なジェンダー構造と共謀しながら、男性の管理概念は強化されていった。この構造の根底には、朴政権のスローガン「為せば成る」（하면 된다）に見られるように、集団生活の調和的で協同的な構成員を想定し、国民一人一人の努力が経済成長に繋がるという国民経済の主体化戦略があった。

本稿では、こうした朴正熙政権以降の競争原理と能力主義に基づく自己管理概念が、現代の韓国男性の美容実践や外見への意識にどのように取り込まれているのかを、彼らの語りから考察する。

Ⅲ. インタビュー調査にみる外見への視座

1. インタビュー調査概要

本稿では、韓国男性の活発な美容実践が生起する文脈と、外見に対する意識を明らかにするために行ったインタビュー調査を紹介する。語りは、筆者が2021年7月～9月に韓国男性15名を対象に行ったインタビュー調査に基づく。調査は、男性化粧品の売上が最も高い年代で、大学進学、兵役、就職活動など、多くのライフイベントを経験する10～30代の韓国男性を対象に韓国語で行った。協力者は、機縁法⁸で紹介してもらい、調査者の友人および友人の紹介と、漢陽女子大学の平井敏晴助教授の紹介を通じて集めた。形式は、H・Iさんの2名については対面で実施し、その他はオンラインで実施した。調査時間は、一人あたり1時間半～2時間程度であった。なお、上述した儒教規範や義務兵役との関係については、稿を改めて論じる⁹。以下、表1に協力者の美容実践に関する情報を載せる。

なお、本調査の分析は、個人が自分の行為やとりまく環境に与える主観的な意味に焦点

⁸ 調査では、美容実践の有無を問わず呼びかけを行い、調査者の延世大学留学中の友人、日本と韓国それぞれでのアルバイト先の友人、シンガポール留学時代の友人、友人の同僚や軍隊の同期やバイト先の知人、日本での友人の紹介、および平井助教授の指導学生の兄弟や友人、恋人等、多様な経路で募集を行い各々の所属や繋がりに極力偏りが生じないように調査を実施した。

⁹ 韓国男性の美意識についての研究には、男性自身の意識と、メディアなど男性を取り巻く眼差しの両面において、儒教規範や義務兵役と関連づけた歴史社会的な視座が不可欠である。儒教規範や義務兵役については、哲学や文化社会論、軍事社会学領域など多岐にわたる先行研究が豊富にあり（クォン2005；ジョ1996）、それらの丁寧な検討が必要である。これらの領域における主要な議論の一つであるジェンダー論的視座からの検討は、小平（2024）を参照されたい。本稿では、現在の共時的な男性の主観的意識と管理概念の関係から考察するが、今後は両者を接合して、共通の歴史と構造に照準することで体系的な研究の達成を目指している。

表1 インタビュー協力者の美容実践に関する情報

	年齢 ¹⁰	居住地	職業	スキンケア	化粧品	美容整形 (外科・非外科)
Aさん	35歳	ソウル市	会社員	○	×	ホクロ取り
Bさん	31歳	ソウル市	大学生	○フェイスパック	△BBクリーム コンシーラー	×
Cさん	22歳	大田市	大学生	○	×	×
Dさん	22歳	大田市	専門学生 ¹¹	○フェイスパック	○BBクリーム カラーリップ	ホクロ取り
Eさん	25歳	龍仁市	大学生	○フェイスパック	×	×
Fさん	32歳	清州市	会社員	○フェイスパック、 セラム	○BBクリーム	レーザー、ピーリング
Gさん	31歳	釜山市	会社員	○フェイスパック	×	レーザー、ホクロ取り
Hさん	19歳	ソウル市	大学生	○フェイスパック	△BBクリーム 眉毛ペンシル	×
Iさん	38歳	ソウル市	会社員	○フェイスパック、 美白クリーム	△BBクリーム	そばかす取り
Jさん	33歳	ソウル市	会社員	○フェイスパック	×	ヒゲ脱毛
Kさん	26歳	龍陽市	会社員	○	×	レーザー、ピーリング
Lさん	38歳	昌原市	休職中	○フェイスパック、 毛穴パック	×	×
Mさん	38歳	ソウル市	経営者	○	△BB・CCクリーム コンシーラー	レーザー
Nさん	20歳	仁川市	大学生	○	×	×
Oさん	31歳	金浦市	飲食店勤務	○泥パック	○BBクリーム	×

○…現在使用中、△…経験あり、×…経験なし スキンケア…化粧水、乳液、日焼け止め以外の化粧品を表記

を当てるため、象徴的相互行為論に基づく。ブルーマーは、個々人のさまざまな意味付与は、他者との社会的相互行為から生じ、それらの意味はものごとを処理する解釈過程の中で取り扱われ、修正されるとする(Blummer 1969=1991: 2)。このような視座は、美容実践や外見への意味づけを分析するのに有効であると考えられる。なぜなら、象徴的相互行為論では、人間は他者の期待や社会の規範を主体的に受けとめ、意味付与(「表示」)し、「解釈」することで自己の行為を対象化し、これらの過程は言語というシンボルを用いた語りの共同構築によって形成されるとするためである(船津1978)。それは、インタビュー調査を用いて、韓国男性の美容実践や外見に対する主観的意識を明らかにするという本稿の目的に寄与するだろう。本稿では、具体的にどのような象徴的相互作用が発動されているのかを分析するツールとして、動機の語彙論を用いることで明確化を目指す。

また、本研究の目的は男性たちの主観的な語りの客観的な相対化であるため、データの代表性を過度に追及することには重きを置いていない。その上で、数名の語りの限定性を考慮しつつ文脈を精査し、インタビューという場にふさわしいものとして選び取られ展開されている、微細な実践をとらえるよう心掛けた。このような前提のもとで、本調査のデー

¹⁰ 年齢は2021年当時の満年齢

¹¹ 2年制の専門大学(전문대학)の学生。日本の短期大学にあたる。

タのなかから、美容実践の意見と外見への意味づけに着目して語りを分類した。かくして見出された共通する言語表現のレパートリーが、Ⅱで取り上げた「自己管理」および「スペック」の語りであった。そこで、以下では、彼らが美容実践についてどう捉え、外見を意味づけているかに着目し、「自己管理」、「スペック」という切り口から検討する。

2. 「自己管理」としての美容実践

美容実践を「自己管理」と結びつけた語りは、本調査で最も多く聞かれた美容実践への意味づけである。以下では、いかなる美容実践が自己管理とされるのかを示唆した3名の語りを採録する。まず、20代会社員のKさんは、日常的なスキンケアやフェイスパックの使用に加え、母親の勧めで皮膚科でのレーザー照射とピーリングを行った経験があった。

* (調査者)：周りで整形している人はいますか？

Kさん：はい、二重まぶたは結構いますね。あとは輪郭手術した人もいます。

*：みなさん女性？

Kさん：はい。

*：輪郭手術。

Kさん：それは治療目的だったみたいです。でも顔がかなり変わりましたね。

*：なるほど。男性の美容整形や化粧についてはどう思いますか？

Kさん：えらいと思います。

*：えらい？

Kさん：はい、外見管理するってそれはつまり自己管理をしっかりとしているということじゃないですか。それは大変なことだし努力しているということだと思うので。努力する人だという感じ？だからえらいと思います。

(原文の韓国語を著者が日本語訳、2021年8月2日採録、下線は筆者追記)

Kさんは、男性の美容実践について、自己の管理という評価軸を導入し、美容実践を努力と結び付けることによって規範的に肯定している。さらに、努力しているえらい人であるという語りからは、美容実践は本人の個人的な趣味趣向ではなく、勉強や仕事のように勤勉さや努力として評価されていることが分かる。このように、美容実践を個人の努力とする考え方は、美容実践を社会的で実用的な行為であると認識しているためと考えられる。先行研究によると、韓国男性の美容実践は、個人的な美しさを追求する女性と異なり、出世術や社会的アイデンティティを表現する手段で、髪や肌の管理はビジネスにおける競争力であり、自信を得るための行為という意識が強い(キム&パク2014)。こうした意識は、前述した若者の就職難や失業率の増加なども相まって、ある種の社会的な義務感や危機感から生じていると考えられよう。加えて、韓国男性の美容実践が、個人の努力をあらゆる社会的行為として認識されるに至った背景には、前述した、1960年代以降の近代国民国家

形成における、家父長的な起業家精神との一致があると解釈できるのではないだろうか。

一方で、女性の美容整形に対する「それは治療目的だったみたいです。でも顔がかなり変わりましたね」という語りからは、顔の形を大きく変える外科手術の反規範性が呈示されており、あくまで治療の必要があったという前提を提示することで肯定していることがうかがえる。こうした意識は、「あくまでも自然な形態のみが美しい女性美として認められる」(ウ2002:80)という、家父長制的な美の規範の反映であると指摘できる。さらに、近年では手術を伴わない注射等による美容整形が、変形ではなく改善を掲げることで、「管理すべき自己」という道徳規範を正常化している(テ2012)。それにより、男性においても自然な美しさが自己管理の条件とされていることとも関係しているのではないだろうか。

このように、とくに外科的な美容整形が規範に同調しているか違背しているかは、その文脈に応じた極めて微細な言説的構築を伴う自己呈示であり、以下のNさんの語りにもあらわれている。Nさんは、日常的なスキンケアと皮膚科での投薬治療の経験があった。

*：男性の美容実践についてどう思いますか？

Nさん：自己管理するのは当たり前だと思います。スキンケアは当たり前だし、化粧品も整形もいいと思います。

*：恥ずかしさはありませんか？

Nさん：恥ずかしさは全くないです。逆にスキンケアや化粧品が男らしくないという方がどうして？と思います。

*：外見を整えるのは自己管理だという認識なのですね。

Nさん：そうですね。でも整形は自己管理ですかね…努力ではあるのですが…。例えば、鼻を高くしたり両顎手術とか…ダイエットとかは自己管理と言えますけど、手術とかは自己管理に入るのかな？と思います。

(原文韓国語を著者が日本語訳、2021年9月11日採録、下線は筆者追記)

Nさんの語りでは、スキンケア、化粧品、美容整形、ダイエットを自己管理と評価する一方、手術をとまなう美容整形を自己管理に含めることには疑問を示している。また、「努力ではあるのですが」という言葉からは、「努力」であっても「自己管理」に含まれる行為とそうでない行為が存在し、その線引きは文脈に依存していることがわかる。

外見管理は、「個人が他人と相互関係を通して自分の役割を演技しながら、自分の個性を表現していく過程と定義され、個人は自分の身体を評価して理想的な身体像と自分との差異を克服するため外見管理行動を通して自分の身体満足度を高めることができる」(Kaiser1990)と説明される。つまり、Nさんの語りからは、自己管理に含まれる美容実践とは、あくまで外見の改善や維持を目的とした行為であり、変形を目的とした外科的な美容整形は、管理概念を超えた行為と認識されていると解釈できるのではないだろうか。

一方で、美容整形を努力とする意見については、美容整形を決断した勇気、治療費の確

保、痛みの忍耐、術後の維持やケア等を意味するのか、または伝統的な成人儀礼において、身体加工の「痛みに耐えること」それ自体を意味化する文脈が内包されているのかなど、今後より精緻な議論が必要であろう。

Nさんの語りからは、管理という単語が身体と密接な関係にあることが分かる。他にも、レーザー治療の経験がある会社員のMさんは、「男性でも歳を取ると、シワができたりするじゃないですか。でもシワが少なくて肌が綺麗だと「管理がよくできている」と言いますね。韓国で「管理がよくできている」という言葉は外見について言いますね。過ぎた時間と比較して本人の努力が行き届いているというように」と述べている。ここでは、「シワが少なくて肌が綺麗」であることを管理がよくできている特徴として挙げており、若さの維持が規範的に努力として肯定されている。近年、アンチエイジングは、管理概念と結びつけられることで、中高年男性の美容実践を促進している。上記のような個人の語りからは、外見を管理の対象とする認識が見えるが¹²、この管理という特徴的な語彙の使用は自明視されており、詳細な分析は行われてこなかった。しかし、ひとは特定の語彙をもって状況を識別して、行為をカテゴリー化したり規範を再解釈するという点で、こうした語彙の検討は、韓国における身体意識の独自性を洗い出すヒントになる可能性を示唆している。

一方で、外科的な美容整形を自己管理に含めることへの違和感の理由としては、管理概念との不一致だけでなく、美容整形には専門家の介入が必要であり、さらに資本等の不平等、公平性、真正性、自律性などの点から生じているとも考えられる。また、1990年代後半に米国から流入した非外科的な手法が、2010年代以降、外科的で過度な美容整形の負の側面を含めた賛否両論とともに、急速に広まった背景と関係しているのではないだろうか。

美容整形の負の側面が社会問題化した事例として、2004年の「扇風機おばさん」(선풍기 아줌마)¹³や、2012年の「整形怪物」(성형괴물)¹⁴という新造語が挙げられる。これについてジョン(2010)は、同時期に美容整形とダイエットにより華麗な変身として大きな話題となった、歌手オク・ジュヒョンの例¹⁵を挙げながら、一見、対立的に見える二つの言説が、「良い整形」と「悪い整形」という区別を生み出しながら、人々の美容整形への関心を高めていった過程を明らかにしている。実際に、BIGKindsを用いた調査によると、「整形」という単語がメディアにもっとも多く登場したのは、美容整形の負の側面が社会問題化して以降の2014年である。さらに前述の通り、2015年には、人口1,000人当たりの美容整形件数が初めて世界第1位となるなど、美容整形の勢いは衰えなかった。

こうした美容整形への賛否は、安全で自然な仕上がりが期待できるレーザーや注射を用いた、「施術」(시술、シスル)と呼ばれる非外科的な手法への人気へと繋がっていった。こ

¹² 例えば、肌の健康を維持するケアは「肌管理」(피부관리)と呼ばれ、肌管理士という国家資格を持った専門家が顔の洗浄等の施術を行う「肌管理室」(피부관리실)という施設が長年にわたり韓国人に親しまれてきた。

¹³ 度重なる整形手術により顔が膨れ上がってしまったハン・ヘギョン氏に対する呼び名

¹⁴ 美容整形の副作用や過度な施術の繰り返しによる画一的で不自然な整形顔をモンスターとして揶揄した言葉

¹⁵ オク・ジュヒョン(옥주현)は、1998年アイドルとしてデビュー後、2004年にダイエットと美容整形により大変身を遂げた姿をテレビ番組で公開し、「成功した美容整形」の例として大きな話題となった。

の「施術」(시술)は、韓国国内において1990年代後半から徐々に認知され始め、安全性が高く、数千円から始められる価格設定と、効果の持続期間が限定的であるという手軽さに加えて、「整形ではないもの」として意味付けされることで、美容整形に対する拒否感を薄めながら日常化を推し進めていった(テ2012)。近年では、女性だけでなく男性の受容も増加しており、調査会社オープンサーベイの「男性グルーミングトレンドレポート2022」によると、20代～40代男性の55%に施術経験があった。本調査においても、協力者15名のうち8名にホクロ・そばかすの除去やレーザー照射などの施術経験があった。テ(2012)は、この「施術」が実用的な身体管理技術となっていくと同時に、変形ではなく改善を掲げることで、「管理すべき自己」という道徳規範を正常化していると指摘している。

このように、美容実践をめぐる説明に用いられる自己管理という言葉は、彼らが自己および他者の行為を解釈し、説明するために用いる共通した語句であり、ミルズの定義である「象徴的な語彙」(ミルズ1971:345)として説明できるのではないだろうか。象徴的な語彙とは、「その状況に、慣習化されるかたちでつきまとい、その状況における規範的な行為を暗示し、正当化するものとして、機能している」(ミルズ1971:347)語句のことである。つまり、自己管理として語られる美容実践は規範的な行為であるとされ、さらに美容整形は「外科的／非外科的」という新たなカテゴリー化によって、正常・逸脱の線引きがなされ、こうした線引きは、自己管理という語彙によって正当化されているのである。また、自己管理という語彙は、自己または他者の行為の「適切な根拠」(ミルズ1971:345)として提示されているとも解釈できる。つまり、Nさんの場合、自己管理という言葉の使用により、スキンケアや投薬治療といった自身の美容実践が、外科的な美容整形とは異なる正常な行為であることを暗に示す機能も果たしているのである。

また、ここで見られる管理という動機用語を用いた行為の線引きは、象徴的な語彙の「統合的機能」として理解することができる。統合的機能とは、ある動機の語彙の適切な選択によって自分の行為を相手に容認させる機能のことで、人々の行為を変えたり、思い留まらせたり、促進したりする効果をもつ(井上他1997:27)。動機を提供する語彙には、様々な型の社会的統制が働いており、そのときどきの典型的な社会的・歴史的状況に依拠している(井上他1997:135)。

3. スペック語り

上述したように、外見は本人の自己管理能力を表す指標として、スペックの一つであると認識されている。調査のなかでも、外見が就職においてスペックになるという語りは多く聞かれた。以下は、大学生であるCさんの語りである。

* : 就職と外見は関係あると思いますか？

C : 専攻によっても違うと思います。僕みたいにコンピューターを専攻している人とかはあまり外見に気を遣ってない気がします。プログラミングがよくできたりすれば、

外見がどうであっても就職に関係ないと思います。でも銀行や他の仕事はすごくスペックになると思います。外見が美しくてきちんと運動をしていて自分を管理できている人の方がいいし、自分が選ぶ側だったら、もし能力が同じなら自分をきちんと管理できている人を選ぶと思います。

(原文韓国語を著者が日本語訳、2021年7月21日採録、傍線は筆者追記)

Cさんは、職種によって外見はスペックになると語り、外見がいい人を「自分をきちんと管理できている人」と、象徴的な語彙を使用して表現している。ここで、外見がスペックにならない例としてプログラマーを挙げており、「プログラマーとかはとくに、学歴とか外見関係ないしスキルがあればいいので」と、専門的なスキルが必要な場合、外見は就職に関係ないとする。つまり、外見がスペックになる「銀行や他の仕事」とは、ここでは専門職ではなく、人と関わる機会の多い職業を指していることがうかがえる。

外見がその人の内面や能力を表わすという考えは、韓国に限った話ではない。例えば、アメリカ人の三分の二が、太るのは自己管理ができないからであり、肥満は貧困のもとであり、貧困は肥満のもとであると考えている (Rhode 2012: 96-97)。このように、外見がその人の判断材料として機能しているという現実、世界的に明らかになっており、例えば、企業の採用にも影響を与えるという言説や人々の認識へとつながっている。そうしたなかで、韓国のケースに特徴的だと考えられるのは、男性においても、美容医療を含む美容実践が自己管理の一つとして、ある種のマナーになっているという点である。さらに、幼少期から始まる競争社会や若者の深刻な就職難、率直に外見に対して言及するコミュニケーション¹⁶など複合的な要因が絡まり、就職や進路において外見が重要な判断要素になるという認識は、ますます強くなっている。

ここで注目すべきは、「能力が同じ場合は外見のよい方を選ぶ」という語りである。こうした、「能力が同じ場合」という限定的な条件では外見がスペックとして機能する、という語り複数聞かれた。このような条件付きの語りは、二種類に分けられる。一つ目は、Cさんのように、採用側の立場に立った語りである。例えば、30代の会社員Aさんは、「僕もたくさん面接を受けたけど、似たような能力ならより良い印象の人の方が点数が高くなると思う。でも別に美男美女である必要はなくて、良い感じの清潔感のある印象が、確実に面接とか就職では有利になると思います」と語っており、就職面接においては良い第一印象が必要であるため、外見がスペックになるとしている。二つ目は、働く側の立場に立った語りである。例えば、20代のエンジニアKさんは、「就活中はそんなの (外見は、筆者注)

¹⁶ 韓国には親しい関係を表す「ウリ」と他人を表す「ナム」という概念が存在し、ウリと認識されるコミュニティは非常に親密な相互関係を特徴とする。「ウリ」は「我々、自分、うち」と訳される一人称代名詞で、血縁、地縁や学縁など様々な共同体を示し、「ナム」はそれ以外の「他人」を意味する。こうしたウリ関係では、外見について遠慮のないコミュニケーションが行われ、「実際に美容整形を受ける人も多いかもしれないが、秘密が持ちにくいウリ関係では話す率が高い。結果的に美容整形の浸透ぶりが目に見える」(川添 2013: 149) こととなる。

関係ないと思っていましたが、入ってみて感じることは、仕事も人間関係じゃないですか。それで、同じ能力であれば、外見がいい人と一緒に働きたいじゃないですか。だから同じ能力であれば、ですね」と述べている。つまり、職場における人間関係のなかで、外見は重要な要素であるため、同じ能力であれば外見を就活のスペックと見なしうると語っている。

このように、就活において外見は他の能力の下位スペックとして位置付けられており、単体ではスペックとなりえないものであると認識されている。他方で、「同じ能力であれば」という語りは、スペックと見なされているはずの外見が、「能力」に含まれていないという矛盾をはらんでいる。これは、就職と外見に関する意識が、語り手たちの間で暗黙裡に共有されており、インタビュー調査という特殊な状況において生じた、「行為の動機を言語化する」という新しい行為の過程であると言えよう。すなわち、当初は行為を説明する際に別の動機を用いていたが、対話において状況を正当化するなかで、新たに動機を採用している。これは、ミルズの「補助的な動機」(ミルズ1971:348)として解釈できよう。就職で外見がスペックとなりうるという語りは、前述した通り、美容実践が管理として個人の努力によって行われ、外見はその結果であるという規範に由来するのである。

一方で、外見によって人の優劣を判断するルッキズムは、とくに就職活動において問題化している。求人ポータルサイトが2020年に実施した調査¹⁷によると、求職者の44%が外見差別の経験があり、70%が「外見評価は気分が悪い」と答えている。近年では、女性だけでなく男性へのルッキズムも是正する動きが強まり、女性労働者を募集・採用する際、職務と関係のない外見条件を提示・要求することを禁止した「男女雇用平等と仕事・家庭両立支援に関する法律」に関して、2021年4月の法改正により男性労働者にも適用するなど、ルッキズムの影響は女性のみならず男性においても問題とされてきていることがわかる。

こうした規範に反した行為の正当化として採用されたのが、この補助的な動機である「スペック」や「同じ能力であれば」という語彙であり、矛盾する可能性のある規範同士を調停する装置として機能する言語セットなのではなからうか。ここでは、韓国男性たちが活発に美容実践を行い、外見が就職に影響すると考えていると同時に、ルッキズムは良くないという規範も併せ持っていることが分かる。さらに、「男性は外見ではなく実力や能力で判断されるべき」というジェンダー的な認識(イム2005)も関係していると考えられよう。

このように、語られる補助的な動機は、「過渡的あるいは限界的な状況では、安定した動機用語は何もなく、もともと違った役割大系に属しているいくつかの動機が二者択一的に組み合わせられて」(ガス&ミルズ1984:138)いる。そして、こうして表明された動機は、相反する社会的葛藤を解決し、行為の社会的様式を効果的に統合し解放する作用を持つのである。こうした象徴的な語彙や補助的な動機の使用により、外見はスペックであるという認識が、単なるルッキズムではなく、合理的な判断であるという語りを可能としているのであ

¹⁷ 求人サイト「キャリア」(<http://career.co.kr/>)が2020年に求職者1063人を対象に実施したアンケート調査

る。これは、ルッキズム的風潮が男性性に編入されていく際に生じる葛藤を、スペックや就職活動と結びつけることで、自己正当化していく男性たちの実践と捉えることができよう。

おわりに

筆者が、韓国男性の活発な美容実践や韓国のルッキズム的風潮に関心を持つのは、本来、美容実践は女性が行う行為であり、さらに外見で判断するのは良くないという二つの規範に照らしているからである。さらに、そうした二つの規範は、韓国においても存在している。この規範に対して矛盾を抱えた、ある種の逸脱的な風潮においては、性別役割分業の解体による男性性の変化や競争の激化など、様々な要因が指摘されてきたが、そうした社会背景と彼らの美容実践が、具体的にいかに結び付くのかという文脈は明らかにされてこなかった。

本稿では、そうした矛盾を彼らがいかに乗り越え正当化しているのかを、インタビュー調査を通して共通して見出された言語表現のレパートリーである、「自己管理」および「スペック」の語りに着目し、これを象徴的相互作用論の視座から捉え、さらに具体的な切り口として動機の語彙論を用いて分析を行った。その結果、彼らは美容実践を自己管理と見なし、努力という評価軸を導入して正当化すると同時に、管理概念が美容実践における正常・逸脱の基準とされていることがわかった。とくに美容整形については、変形を目的とした外科的な美容整形は、外見管理の範疇を超えた逸脱であるとの認識がある一方、管理概念に認められる、維持・改善を目的とした非外科的な施術は、自己管理とされる傾向にあった。そして、外科的・非外科的というカテゴリーと管理概念の接合により、行為の正当性が強化されていた。そこで使用される「管理」という語は、当該の状況における規範的な行為をシンボルとして表示し、正当であると解釈するための「象徴的な語彙」として機能し、管理概念が美容実践の適切性の根拠とされていることが示唆された。

さらに、外見は個人の自己管理能力を表すとして、就職競争においてスペックとして機能しようと認識されており、他のスペックが同等の場合は、外見での選別が合理的な手段であると語られていた。このようなスペックの序列化は、美容実践が管理として個人の努力によって行われ、外見はその結果であるとする規範と、ルッキズムは良くないという規範の折衷案として採用された、合理化のための「補助的な動機」であると考えられる。

本稿で得られた今一つの知見は、一見、従来の規範と矛盾するような韓国男性の積極的な美容実践が、言語というシンボルを介した相互作用によって正当化される解釈図式である。それは、穏やかに共有された規範的知識である管理概念に言及するかたちで、美容実践や外見に対する意識の適切性に関するルールが強化されていく過程である。本稿の調査で聞かれた語りでは、男性の美容実践は、実用的で男性規範に相反しない社会的行為として認識されており、自己管理やスペックといった語彙を通して、無意識的かつ戦略的に選り取られていた。つまり、彼らの美容実践は、男性の女性化や男性性の変容を意味する行

為ではなく、管理された美しさが価値となる新自由主義的風潮と、朴正熙時代の伝統的規範に根差した競争原理および能力主義の身体化であると解釈できるだろう。

本稿では、韓国男性の美容実践が男性優位主義に相反する行為ではなく、社会構造や歴史を維持・強化する「新しい男性性」を編制する行為である可能性を示唆した。今後の課題としては、本稿では個人的視座に焦点を当てたが、更に年代や属性を広げた調査を行うことで、ここで得られた知見をより一般化された議論へと発展させたい。加えて、通時的なメディア分析と、儒教と義務兵役との関係を考察し接合することで、男性優位社会における男性性が、一見女性性と結びつきそうな行為によって維持・再構成されているメカニズムを明らかにしていきたい。

参考文献

[日本語文献]

- 井上俊他 (1997)、『岩波講座 現代社会学〈1〉現代社会の社会学』岩波書店。
- 川添裕子 (2013)、『美容整形とく普通のわたし』青弓社。
- 栗原圭介 (1986)、『新釈漢文大系35孝経』明治書店。
- 鈴木智之 (2013)、『「心の闇」と動機の語彙—犯罪報道の一九九〇年代』青弓社。
- 谷本奈穂 (2018)、『美容整形というコミュニケーション—社会規範と自己満足を超えて』花伝社。
- 原克 (2010)、『美女と機械—健康と美の大衆文化史』河出書房新社。
- 船津守 (1978)、「シンボリック・インタラクションと「解釈」』『日本社会学評論』29(2)、2-14ページ。
- 西倉実季 (2005)、「『美』を論じるフェミニズムの課題—二元論的思考を超えて』『F-GENS ジャーナル』4、61-67ページ。
- 小平沙紀 (2024)、「韓国男性にみる美容実践と男性性の位相—軍隊におけるコミュニケーションに注目して』『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』106。

[英語文献]

- Davis, K (2013), *Reshaping The Female Body: The Dilemma of Cosmetic Surgery*, London: Routledge.
- Featherstone, M, Hepworth, M, & Turner, B. S (1991), *The Body: Social Process and Cultural Theory*, New York: SAGE Publications.
- Fraser, S (2003), *Cosmetic Surgery, Gender and Culture*, New York: Palgrave Macmillan.
- Foucault, M (1976), *Histoire de la sexualité, vol. 1, La volonté de savoir*, Paris: Gallimard. (= 渡辺守章訳 (1986)、『性の歴史 I : 知への意志』新潮社。)
- Mills, C. Wright (1940), “Language, Logic, and Culture”, *American Sociological Review* 4(5), pp. 670-680. (= 青井和夫・本間康平訳 (1971)、『権力・政治・民衆』みすず書房。)
- Gerth, Hans and C, Wright Mills (1964), “Chapter V: The Sociology of Motivation, Character and Social Structure: the Psychology of Social Institutions”, *Harbinger Books*, pp. 112-129. (= 古城利明・杉森創吉訳 (1970)、『現代社会学大系15性格と社会構造』青木書店。)
- Gimlin, D (2012), *Cosmetic Surgery Narratives: A Cross-Cultural Analysis of Women's Accounts*, London: Palgrave Macmillan.
- Hakim, C (2011), *HONEY MONEY: Why Attractiveness is The Key to Success*. London: Penguin. (= 田口未知訳 (2012)、『エロティック・キャピタル』共同通信社。)

- Haiken, E (1997), *Venus Envy: A History of Cosmetic Surgery*, Baltimore: Johns Hopkins University Press. (= 野中邦子訳 (1999), 『プラスチック・ビューティー 美容整形の文化史』平凡社.)
- Kaiser, S. B (1990), *The social psychology of clothing: symbolic appearance in context (2nd ed.)*, New York: Macmillan.
- Rhode, D (2010), *The Beauty Bias: The Injustice of Appearance in Life and Law*, New York: Oxford University Press. (= 栗原泉訳 (2012), 『キレイならいいのか—ビューティ・バイアス』垂紀書房.)
- Walkerdine, V (2003), “Reclassifying Upward Mobility: Femininity and The Neo-Liberal Subject”, *Gender and Education*, 15(3), pp. 237-248.
- Blumer, Herbert, 1969, *Symbolic interactionism: perspective and method*, Hoboken: Prentice Hall. (= 後藤将之訳 (1991), 『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法』勁草書房.)

[韓国語文献]

- 권인숙, 2005, 『대한민국은 군대다—여성학적 시각에서 본 평화, 군사주의, 남성성, 청년사』 청년사. (= 山下英愛訳 (2006), 『韓国の軍事文化とジェンダー』御茶の水書房.)
- 김정희, 김경희 (2021), “20-30대 남성의 외모관리행동이 자아존중감에 미치는 영향”, *한복문화학*, 24(2), pp.59-70.
- 김혜균, 박명희 (2014), “20·30대 직장인 남성들의 사회심리적 의식이 외모관리행동에 미치는 영향”, *디지털디자인학연구*, 14(4) (통권44) 2, pp.319-327.
- 김희선, 서혜선 (2019), “그루밍족 트렌드”, *한국마케팅연구원 마케팅*, 53(8), pp. 50-59.
- 박소진 (2007), “공간적 위계수사와 구별짓기: 강북 어머니들의 자녀교육 내러티브”, *한국문화인류학* (40) 1, pp.43-81.
- 안채운 (2019), “신체이미지가 외모관리행동, 자아존중감, 대인관계에 미치는 영향: 성인남성을 대상으로”, *한국콘텐츠학회*, 19(6), pp.620-631.
- 이귀옥 (2013), “‘강한 남자’에서 ‘아름다운 남자’로: 1970~1990년대 남성 잡지광고에 나타난 남성 이미지의 변화와 표현방식”, *미디어, 젠더 & 문화*, 22, pp.151-185.
- 이상록 (2017), “산업화시기 ‘출세’·‘성공’ 스토리와 발전주의적 주체 만들기: 박정희 체제에서 탄생한 ‘호모 에코노미쿠스’를 중심으로”, *人文學研究*, 28, pp.43-93.
- 임인숙 (2005), “남성의 외모관리 허용수위와 외모불안 지대”, *한국사회학*, 39(6), pp. 87-118.
- (2015), “외모차별 사회의 외모불안감과 노화불안감”, *한국사회학*, 49(4), pp. 199-233.
- 임인숙, 최지원 (2022), “신자유주의적 외모 통념과 한국 여성의 외모 감시”, *한국사회학*, 56(1), pp. 115-149.
- 우경자 (2002) “여성의 외모주의와 성형의료산업”, *연세대학교 대학원사회학과 박사학위논문*.
- 전보경 (2010), “몸-자아 테크놀로지로서의 미용 성형에 대한 계보학적 담론 연구”, *이화여자대학교 대학원 여성학과 석사학위논문*.
- 조혜정, 1993, 『한국의 여성과 남성』 문학과지성사. (= 春木育美訳 (2002), 『韓国社会とジェンダー』法政大学出版局.)
- 태희원 (2012), “‘즉각적인 몸 변형’ 기술로서의 미용성형과 몸 관리의 정서”, *젠더와 문화* 5(2), pp. 79-111.

過去の留守児童経験の捉え方及びその影響

—一人の日本在住元留守児童のライフストーリーを通して—

The Perceptions and Impact of Past Experiences as a Left-Behind Child :
The Life Story of a Former Left-Behind Child Living in Japan

周 亜 芸

ZHOU Yayun

Abstract

This paper focuses on a former Left-Behind Child living in Japan (Xiang) and uses the life story research method to analyze how Xiang perceives his past experiences as a Left-Behind Child and the impact of these experiences on his life after coming to Japan. It was found that although Xiang lived away from his parents for a long period of time, he was able to have an enjoyable childhood and positioned his past experiences as a Left-Behind Child in a positive light. On the other hand, although Xiang was able to have a childhood with no financial difficulties, it was seen that he was somewhat adversely affected psychologically by his parents' long-term absence. It was also found that Xiang perceived that his past experiences as a Left-Behind Child allowed him to become independent earlier than most children and to move forward without fear of hardship or difficulty.

In this paper, only one former child away from home living in Japan was taken as a collaborator in the survey. Therefore, it can be positioned as one of the case studies in the research on Left-Behind Children living abroad. Xiang, our research collaborator, officially started living in Japan when he was 14 years old. By the time he arrived in Japan, he already had a high level of Chinese language proficiency and an established Chinese identity as a former Left-Behind Child abroad. However, some of the former Left-Behind Children in Japan came to Japan at a younger age, when their mother tongue had not yet been fully mastered and their identity had not yet been established. We would like to analyze the life stories of these former children who came to Japan at a younger age, and clarify the impact of their past experiences as a Left-Behind Child on their later lives.

要 旨

本稿は、日本に在住している元留守児童（翔）を取り上げ、ライフストーリーという研究方法を使って、翔の過去の留守児童経験の捉え方、及びその留守児童経験が来日後の生活に与える影響を分析した。翔は、長期間親と離れて暮らしていたが、楽しい子ども時代を送ることができ、過去の留守児童経験を肯定的に位置付けていることが分かった。一方、翔は経済的には全く不自由のない子ども時代を送ることができていたが、親の長期的な不在によって心理的な面においては若干悪影響を受けていることが窺われた。また、翔は、過去の留守児童経験があっ

たからこそ、一般の子どもより早く自立し、苦勞や困難を恐れずに前に進むことができると捉えていることが分かった。

本稿では、調査協力者として日本に在住している元留守児童1人のみを取り上げた。ゆえに、海外に在住する元留守児童研究におけるケーススタディの一つとして位置付けられる。また、本稿の調査協力者の翔が、正式に日本で生活し始めたのは14歳であった。日本に来た頃にはすでに高い中国語力を持っていた上、中国人というアイデンティティも確立されていた元留守児童である。しかし、日本に在住している元留守児童の中には、母語がまだ十分に習得されておらず、アイデンティティも確立されていない低年齢層のうちに日本に来た者もいる。低年齢期に来日した元留守児童についても、今後彼らのライフストーリーを分析し、過去の留守児童経験がその後の人生に与える影響を明らかにしたい。

はじめに

改革開放以降、中国の沿岸部都市を中心に経済が急速に発展し、それに伴い農村部から都市部へ出稼ぎに行く労働力の移動が大量に発生し、「民工潮」¹という現象が起きた。中国国内では「二元戸籍政策」²によるさまざまな制限があるため、都市に出稼ぎに行く親と離れ離れになって農村に残されなければならない「留守児童」が大量に生み出された。これまでの中国国内の留守児童に関する研究には十分な蓄積があり、多様な分野にわたる調査がされてきた（鄭他2013、徐他2017、邢2019、尹2019）。

中国の留守児童研究のうち、特に留守児童は「不安定な情緒」「低い学習意欲」「乏しい規範意識」を持つなどとして否定的に特徴づけられ、「問題児集団」としてレッテルを貼られていることが多い（秦他2009、陳2014、徐他2017）。そのような支配的言説を無意識のうちに受け入れた元留守児童が、過去の留守児童経験を否定的に捉え、大人になっても過去の経験を引きずり、現在の生活やキャリアにも悪影響を及ぼしているという報告がある（汪他2014、謝2016、紀2016、益満2018）。

一方、上述した先行研究は全て中国国内の元留守児童を対象としたものであり、海外にいる元留守児童を取り上げたものは筆者の知る限りない。近年、中国もグローバル化の進展が加速する中、国を越える移動もさらに頻繁になり、海外へ出稼ぎに行く一般労働者も増えている。親だけが海外へ出稼ぎに行き、子どもを中国国内の親戚に預けることがほとんどである。また、親が出稼ぎ先の外国で安定した生活基盤を確保した後に、中国にいる子どもを外国に途中で呼び寄せるケースも多い。このような海外に在住している元留守児童が過去の留守児童経験をどのように捉えているのか、また過去の留守児童経験がその後の人生に

¹ 中国の農村地帯から広州・上海・福州など沿岸部の大都市に向かう出稼ぎ農民の大移動をいう。出稼ぎ農民は1980年代後半から盛んになり、当初は無秩序な都市への流入は「盲流」と呼ばれたが、ここ数年は改革・開放路線による経済発展に伴う必然的な現象として定着し、呼び方も民工潮と変った。（<https://kotobank.jp/word/民工潮-158164>）閲覧日2023年6月15日

² 中国では1958年の戸籍登記条例により、「農村戸籍」と「非農村戸籍（都市戸籍）」は厳格に区別され、農村住民と都市住民がまったく異なる社会を構成し、異なる社会的待遇を受けるという「二重社会構造」が定着した（鎌田2010）。

どのような影響を与えるのか、などの問いに答える研究は今のところ見当たらない。

上記のような問題意識を踏まえて、本稿では、ケーススタディとして、日本に在住している元留守児童（翔）を取り上げる。ライフストーリー研究法を通して、翔が過去の留守児童経験をどのように捉えるのか、またその経験が来日後の人生にどう影響を与えるのかを明らかにする。

I 先行研究

2010年の中国全国婦聯の計算基準によれば、父母両方もしくは片方が6ヶ月以上都市部に出稼ぎに行き、農村部に残された18歳未満の子どもが「留守児童」と定義されている（全国婦聯2013）。本稿では、かつて中国で留守児童の経験をした者を「元留守児童」と呼ぶことにする。元留守児童の翔の来日前と来日後の生活を深く理解するために、質的方法の一つであるライフストーリー研究法を用いる。本節では、まず、中国国内の元留守児童の研究現状を概観する。次に、ライフストーリー研究法及びそれに関する先行研究を紹介する。そして最後に、本稿の研究課題を提示する。

1. 中国国内の元留守児童の研究現状

近年、中国国内の元留守児童に関する研究には、過去の留守児童経験が大学生の心理健康に悪影響を与えることを調査した研究（李他2010、温他2010、詹他2016）と、過去の留守児童経験が農民工のキャリアや転職率に影響を与えることを調査した研究（汪他2014、謝2016、紀2016）がある。また、対話を通して過去の留守児童経験を捉え直すことで、元留守児童の主体性を獲得することを目指した研究もある（周2019、周2020、周2021）。以下では、これらの先行研究のいくつかを取り上げて紹介する。

李他（2010）は、過去に農村での留守児童経験を持つ大学生と、留守児童経験を持たない大学生との心理的・行動的特徴の違いを調査した。具体的には、河北省の2つの大学の大学生4,080名を対象に、うつ病尺度、状態特性不安質問票、簡易対処スタイル質問票、自尊感情尺度、大学生の対人関係総合診断尺度を用いて、質問紙調査を実施した。調査の結果、否定的感情、否定的対処スタイル・対人関係は、留守児童経験を持つ大学生において有意な正の相関を示し、肯定的対処スタイル、自尊心、対人関係は、有意な負の相関を示した。回帰分析の結果、否定的感情、対処スタイル、自尊心は、留守児童経験を持つ大学生における対人関係の有意な予測因子であった。最後に、留守児童経験を持つ大学生と留守児童経験を持たない大学生の心理的行動の差は統計的に有意であり、前者に対する適切な心理的介入が必要であると論じた。

汪他（2014）は、2005年に中国における19の都市の出稼ぎ農民工（第二世代農民工）に対するアンケート調査から1%（3536人）のサンプル調査データを抽出して、過去の留守児童経験が第二世代農民工のキャリアに影響を与えているかどうかを調べた。その結果、

留守児童経験を持つ第二世代農民工は同世代の留守児童経験を持たない第二世代農民工に比べて、転職率と初職の離職率が高いことが分かった。また、肉体労働の職種と非熟練の職種の離職率においても、留守児童経験を持つ第二世代農民工は持たない農民工に比べて高いことも分かった。一方、精神労働職種と熟練／半熟練職種の離職率においては、両者の間に統計上の有意な差は認められなかった。

謝 (2016) は、「完全留守」と「非完全留守」、「長期留守」と「短期留守」という二つの指標を用いて、北京の出稼ぎ農民工1034人 (男性567人、女性467人) に対する調査データを用いて、留守児童経験が第二世代農民工の転職率に与える影響を調べた。全ての対象者のうち、留守児童経験を持つ第二世代農民工は276人で、全体の26.69%を占めた。分析の結果、(1)留守児童経験を持つ第二世代農民工の転職率は同世代の農民工より高いことが分かった。また、(2)完全留守の第二世代農民工が非完全留守より転職率が高いことも明らかになった。さらに、(3)長期留守者が短期留守者より転職率が高いことも報告された。そのほかに、同じ留守経験を持つ第二世代農民工でも、男性農民工が女性農民工より転職率が高いことも明らかになった。女性農民工よりも男性農民工のほうが、留守児童の経験によって与えられる負の影響が大きいことが分かった。

以上のように、留守児童経験は留守児童である時期のみに影響を与えるだけではなく、元留守児童の成人後の人生やキャリアにも深刻な影響を与えていることが読み取れる。一方、大量の元留守児童も中国社会の構成員であり貴重な担い手である。彼らの生き方や行動基準は社会全体に多大な影響を与えている。そこで、周 (2020) は、過去の留守児童経験を捉え直すことは、元留守児童がこの社会で主体的に生きていくために重要な課題であると主張した。周 (2020) では、対話的問題提起学習を援用して、筆者 (周) と元留守児童 (彩) が対話を4回行った。彩は過去の留守児童経験を封印しようとし、対話の初めではその経験を言語化することを拒否した。その結果、周の質問に対して、彩が短く答える一問一答形式の「対話」が進んでいた。しかし、「キャンパスローン」という話題を周が導入したことをきっかけとして、彩は自己と社会との繋がりを実感し、能動的に対話に関わり始めた。そして1年後ついに、彩はテキスト作成を申し出、自身の過去の留守児童経験を言語化した。周と彩がそのテキストをもとに農民の出稼ぎによる留守児童問題について議論した際には、留守児童当事者として、自分を取り巻く世界の現実に向けて主体的に働きかけようとする彩の意志の形成が窺われた。

一方、上述した元留守児童に関する先行研究は、全て中国国内の元留守児童を対象としたものである。海外にいる元留守児童が、過去の留守児童経験をどのように捉えているのか、またその経験がその後の人生にどんな影響を与えているのかも明らかにはされていない。

2. ライフストーリー研究法及び関連研究

ライフストーリーは、もともとその上位概念であるライフヒストリー研究法に由来している。個人的なものを社会的なものに関連づけて解釈する手法に豊かなストックと可能性

を提供できるのが特徴である（桜井2002：14）。本稿で用いるライフストーリー研究法は、対話的構築主義に依拠した研究法であり、「語り手が『何を語ったのか』という語りの内容に関心が集中するが、『いかに語ったのか』と、語りの様式にも注意を払うアプローチである。語り手とインタビュアーとの相互行為を通して構築されるものである」（桜井2002：28）と捉えている。以下に、ライフストーリーを使った先行研究（張2010、中井2017、王他2022）を紹介する。

張（2010）は、中国に残された日本人残留孤児の養父母に対してライフストーリー聞き取り調査を実施し、そのうちの3人の養母を中心に、残留孤児を引き取った動機と経緯、心境、及び現在の生活実態を考察した。「中国に残された日本人残留孤児」とは、第二次世界大戦後、日本人の親が日本に引き揚げたために、孤児として中国に取り残された日本人の子どもを指す。張は、調査対象者である黒竜江省ハルビン市と吉林省長春市に在住する養母に対して、生まれてから調査時までのライフストーリーに関する内容でインタビューを行った。分析の結果、中国人の養父母が日本人残留孤児を引き取った動機としては、①「子どもがかわいそうだから」という養父母のコミュニティの中で出来上がったモデル・ストーリーが存在していたことと、②「養児防老」、「子どもの老親扶養」「中国農村部の社会保障制度」などという、中国の文化・社会的な文脈に依存する多元的動機があったことが分かった。また、「日本人の子である」ことを超えて、「一人の人間として引き取った」ことも明らかにされていた。養父母の生活実態の多くを、無年金で、頼るべき実子も失業中か不安定なアルバイトでギリギリの生活をしている、と語る養母は6人中5人にも及んだことが分かった。張（2010）は、中国人留学生という立場だからこそ、中国残留孤児の養父母に対するインタビューに成功し、彼らの語りの中から微妙な心の襞や思いを掬い上げることができ、当事者の生活世界を深く理解し解釈できたとと言える。

中井（2017）は、留学を経て就労している一人の滞日中国人（王さん）が、なぜ日本で働き続けるのかという主体性に関わる自我アイデンティティの交渉と構築の過程を、時間の流れの中で分析した。分析の結果、王さんには、中国・日本という2つの文脈における社会交渉を通して自我アイデンティティが構築されていることが明らかになった。中でも、日本で抱える困難に対処するために、取り巻く環境に積極的に働きかけながらも、「永住権取得を目指す中国人」というリプレゼンタティブ・エスニシティを妥協点として、自我アイデンティティが維持されていることも明らかになった。分析結果から分かるように、ライフストーリー研究法を通し、異文化との接触によって個人に生じる内的な問題をアイデンティティに着目して考察することができる。また、日本や中国社会との交渉を通じて、調査対象者の留学に見出していた「成功」という意味が変容していく過程を読み取ることができた。

王他（2022）は、国際結婚の議論と2011年の東日本大震災を交差させ、国際結婚で来日移住した中国人女性を対象に、二人のライフストーリーの描写を通して、国際結婚の社会的文脈を踏まえつつ、震災に刺激されている女性たちの主体性を論じた。震災後の2人の女性の行動を分析した結果、女性の主体性は家族という枠にとどまらず、生活するコミュ

ニティにも表れていることが明らかになった。2人とも移住社会で既に独特な生活哲学を見出し、自分なりに日中の狭間で生きているように見えるが、日中のどちらにおいても、彼女らの帰属感が感じられない事実は存在していると述べられている。分析結果から、ライフストーリーは、語り手の所属するコミュニティや人種、民族、階級などの重層的な社会的コンテクストから離れて解釈することはできないことが分かる。

上記の先行研究から見ると、ライフストーリー研究法は、エリートではなく権力や富からは遠い周縁人を対象とすることが多く、自らの生を語ることを抑圧されたり、支配的文化から周縁化され無視された人々に注目していることが分かる(桜井2002:33)。本稿の調査協力者の元留守児童もグローバル化の進展に伴う産物であり、自分の生まれ育った中国社会においても、親の出稼ぎ先の外国においても、支配的な階層ではなく、むしろ支配的文化から周辺化された人々だと言える。また、筆者もかつて留守児童経験を持つ元留守児童であるため、同じ元留守児童の生活や気持ちはより深く理解できる。「語り手とインタビューとの相互行為を通して構築されるものである」(桜井2002:28)というライフストーリーの特徴から見ると、共通の留守児童経験を持つ筆者と調査協力者との相互の文脈を持ったストーリーが構築されることが期待できる。上記の理由を踏まえて、本研究はライフストーリー研究法に適していると考えられる。

本稿は、海外に在住している元留守児童の過去の留守児童経験の捉え方とその影響を明らかにすることによって、留守児童問題をよりグローバル的に捉えることを目指す。この目的を踏まえて、以下の研究課題を設定した。

研究課題：日本に在住している元留守児童(翔)は、過去の留守児童経験をどのように捉えているのか。その留守児童経験が来日後の翔の人生にどんな影響を与えているのか。

II 研究方法

1. 調査協力者

本稿の調査協力者(翔)の両親は共に中国の福建省出身で、幼馴染みだった。1990年代に2人で来日し、日本語学校と大学を卒業してから、その後日本で結婚し就職して現在に至るまで日本で生活している。翔の経歴を以下の表1にまとめた。

表1 調査協力者(翔)のプロフィール

0～2ヶ月	日本の東京都で生まれた。
2ヶ月～14歳	中国福建省で祖父母と暮らしていた。途中から4歳下の妹と従兄弟3人も一緒に暮らすようになった。
14歳～19歳	両親、妹と4人で、日本の東京都で暮らしていた。東京の中学校、高校に通っていた。
19歳～21歳(調査時)	高校卒業後は日本で起業し、日中貿易関係の会社を立ち上げた。

2. 調査依頼の経緯と調査期間、調査方法

筆者と翔が出会ったのは、2016年に筆者が大学院に通いながら支援者として参加していた「NPO 法人子ども LAMP」³という支援教室であった。この支援教室では、外国にルーツを持つ中学生を対象に、母語が話せる各国の母語話者支援者と日本語母語話者が中学校の国語教科を教える、「母語・日本語・教科相互学習」モデルを導入した学習支援活動が週に1回行われていた。翔は日本に来たばかりで、東京都にある中学校に通いながら、週に1回この支援教室に来て、中国語と日本語による国語教科の学習支援を受けていた。その後、翔が中学校を卒業して、学習支援活動に参加しなくなってから現在に至るまで、筆者と友人としての交流が続いており、悩みや葛藤などを共有できる信頼関係が築き上げられている。そのため、翔は本稿で用いるライフストーリー研究法の特徴と照らし合わせても、有力な協力者であると考え、調査を依頼した。

筆者は、2022年8月に翔に本稿の趣旨を伝え、調査のための半構造化インタビューを正式に依頼した上、翔の承諾を得た。半構造化インタビューは2022年8月と2022年11月に2回実施し、毎回の時間は90分～120分である。場所については、2回とも翔の馴染みのあるカフェで行われた。インタビューは全て中国語で行った。インタビューの内容項目は主に「来日前の生活」と「来日後の生活」についてである。1回目は翔が生まれた時から現在（調査時）に至るまでの経験について話し合い、2回目は筆者が気になった点や質問について翔に補足説明をしてもらった。インタビューの会話はICレコーダーに録音した。また、2回のインタビューのほかにも、筆者が翔と WeChat⁴でインタビューの内容に関する確認を何度も行った。その後、筆者は2回のインタビュー・データを踏まえて論文としてまとめることを翔に伝え、翔の同意を得た。

3. ライフストーリーの作成

2回の半構造化インタビューの音声をまず中国語で文字化し、時間軸に沿って並び替えてストーリーを作成した。抽出したデータを全て日本語に訳した。ストーリーは、インタビューの元データをそのまま引用した部分と、インタビューや WeChat のやりとりをもとに筆者がまとめた部分で構成している。以下のストーリーでは、翔の言葉を直接引用した部分は「 」で示してある。また、ストーリーに出てくる「*」は筆者のことである。（ ）は筆者の補足説明である。

³ NPO 法人子ども LAMP では、地域の外国系児童生徒を対象に「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」（岡崎 1997）に基づいた学習支援を行っている。子ども LAMP の“LAMP”は、“Language Acquisition and Maintenance Project”（第二言語習得及び母語保持育成プロジェクト）のことで、「子どもたちに明るい未来を！」という願いが込められている。

⁴ WeChat（微信、ウィーチャット）は、Tencent（騰訊）が2011年にリリースした無料のメッセージングアプリである。

4. 分析結果と考察

(1) 翔のライフストーリー

まず、翔のストーリーを大きく「来日前の生活」「来日後の生活」という区切りでまとめた。「来日前の生活」には、①生まれる前後、②小学校時代、③中学校時代、そして、「来日後の生活」には、①中学校時代、②高校時代、③高校卒業後から現在に至る、の3つずつに区切った。

「来日前の生活」

① 生まれる前後

翔の「両親とも1970年代生まれで、1980～1990年代の海外留学や海外出稼ぎのブームに乗って日本に来」て、留学生として来日した。留学が終わってからそのまま日本に残って就職し、そして2001年に翔を生んだ。

翔：「僕は日本で生まれた。両親は日本で共働きだったため、僕が生まれてから2ヶ月後に中国に送られた。これが僕が留守児童になった原因である。おばあさん（父方の祖母）は僕の面倒を見たくなかったから、祖母（母方）が僕を引き取ってくれた。そこで、僕は祖父母のもとで育てられた。僕の世代では自分が一番年上の男の子だから、子どもの頃から周りの大人に可愛がられていた。」

下線部の内容から、翔は、子どもの頃から自分が留守児童であることをはっきり認識していることが読み取れる。「2005年まで祖父母の近くの子どもは僕しかいなかったが、その後には妹が生まれて、そして2006年に叔父の長男、2009年に叔父の次男、2011年に叔父の三男も次々と生まれて、祖父母が全部で5人の子どもの面倒を見てくれた。僕たちは全員留守児童だった」。言い換えれば、翔だけではなく、自分の周りの子どももみな共通の経験をしているため、留守児童という存在を特別なことではなく、普通の現象として捉えていることが窺われる。翔は生まれた直後から両親と遠く離れて生活していたが、祖父母や周りの親戚から多くの愛情を注がれたことが分かる。

翔：「僕の両親が日本に来たのは90年代だから、日本は悪くない時代だった。生活はかなり良かった。子どもの頃に僕が住んでいた福建省の農村とお姉さん（筆者）が住んでいた農村とは全然違うね。僕が住んだ農村は、農村というより、小さな鎮⁵という感じで、比較的豊かである。そう、福建省においても比較的裕福なほうである。」

⁵ 中国の郷級行政区である。中国語では町のことを指す普通名詞でもあるため「行政建制鎮」あるいは「建制鎮」とも呼ばれる。この鎮とは都市よりも人口の少ない人口集中区域で、給水、電力供給、下水などの公共インフラや教育、飲食、娯楽、市場などがまとまって集中し、周辺の地域に経済作用をもたらす地域をいい、住民の多くは農業以外に従事する。（<https://www.weblio.jp/content/%E9%95%87>） 閲覧日2023年12月7日

翔が、自分の育てられた農村は海外へ出稼ぎに行く若者が多く、経済的にも豊かであることを述べた。翔の両親も日本に出稼ぎに来ているため、収入も良く一般の農村家庭よりは裕福であったという。このように、翔は、両親がそばにいない代わりに、物質的に不自由のない子ども時代を送っていたことが分かる。

② 小学校時代

中国国内にいる留守児童の保護者は、主に1) 片親に養育される、2) 祖父母や親戚に養育される、3) 留守児童自身の力で生活する、の3つのパターンに分かれる。翔のような元留守児童の場合は、両親の出稼ぎ先は外国であるため、子どもを国内の親戚に預けるのがほとんどである。

翔：「実は、子ども時代はのびのびしていて、とても楽しかったと思う。あの頃、親に面倒を見てもらって、親がそばにいてほしいとは思っていた。特に、学校に送り迎えをしている子どもの親とかがいるのを見て、実は自分の心の中でもそう願っていたようなところがあった。授業が終わったら、自分の親も学校の外まで迎えに来てくれることを少し期待していた。しかし、実は、僕は自分の親にあまり期待していなかった。僕は子どもの頃から、祖父母から多くの愛をもらったから、親の愛をすごく期待していたわけではない。」

一方、翔は、不自由のない子ども時代を送っていたと言いながら、両親の愛情にも憧れていたことが下線部の内容から読み取れる。特に、学校で子どもを送迎する他の親を見るたびに、翔は自分の両親の不在に気づき、普段あまり意識しなかった自分の気持ちが鮮明に蘇ってくることを振り返っていた。

*：両親もよく日本からお土産とか送ったりしてくれた？

翔：「うん。両親がいろいろなものを送ってくれた。それに、祖父母は多くのお金を全部僕たちのために使っていた。」

*：つまり、お金には困らない生活だったのね。

翔：「食べ物にも着る物にも困らなかった。でも、祖父母のしつけはとても厳しくて、直接お金やお小遣いをくれることはなかった。もし学校で何か必要なものがあったらお金はくれるが、外でおやつを買ったりするお金はくれなかった。それから、もらったお年玉も全部祖父母が管理していたから、子どもの頃にはあまりお金を持っていなかった。13歳で中学校に上がるまでは自分が使えるお金を持っていなかった。」

翔は生まれた直後から日本に来るまでは、中国にいる母方の祖父母と一緒に暮らしていた。「父方の祖父母に育てられた留守児童は甘やかされる傾向が強いから、そういう留守児童には悪い習慣が身につきやすい」が、自分はしつけが厳しかった母方の祖父母に育てら

れたため、甘やかされることはなかったと翔は言う。祖父母の厳しさの裏には、「僕の両親がそばにいないから、責任を持って僕を育てないと、悪い子どもになったら無責任だと出稼ぎの親から思われるのであろう」と翔は祖父母の気持ちをよく読み取っていた。そのため、「一番親しくて感謝しているのがやっぱり祖父母だ」とインタビューの時に何度も強調していた。このように、翔は、海外で出稼ぎしている両親の愛に憧れつつ、自分を育ててくれた祖父母に対する感謝の気持ちは常に持っていることが分かる。

③ 中学校時代

翔：「周りの留守児童は家庭にもよるが、多くは父方の祖父母が面倒を見ていたから、反抗的でわんぱくな子どもが比較的多かった。でも（母方の）祖父母は僕をとってもよく育ててくれたから、僕は全然反抗的ではなかった。ただ祖父母の管理が少し厳しかったため、中学校に上がると祖父母から解放されて自由に遊んでいた。中学校は寄宿生で昼休みだけ家に帰っていたため、誰も干渉できなかった。その頃はちょうど思春期に入って、周りに対して反抗し始めていた。また、タバコやお酒もやり、学校で喧嘩もよくした。その中学校では僕の名前が悪い意味でよく知られていた。」

翔はしつけが厳しかった祖父母のもとで育てられて、小学校まではおとなしい子どもだったという。しかし、中学校に上がるとともに、翔は周りの同級生の影響を受けて悪い習慣も身につけてしまった。そして、中学2年生の時に「両親も僕の性格の変化に気づいていたようで、日本に来るように」、両親が翔を説得した。翔も「実は日本に来ることを楽しみにしていた。自分が子どもの頃から日本に対して、『海外』『飛行機に乗らないといけない場所』『とても遠い』というイメージ」を持っていたから、海外に行っているいろいろ見てみたいという気持ちを子どもの頃から抱いていたという。そこで、両親の言う通りに、翔はずっと一緒に暮らした祖父母のもとを離れて、2016年3月に両親の出稼ぎ先の東京に来た。

「来日後の生活」

① 中学校時代

翔：「僕は16歳（実際は14歳）の時に日本に来た。あの頃は毎日泣いていた。「日本にいたくない」と、毎日両親と喧嘩していたが、僕を中国に送り返さなかった。日本に来る前は、「いつでも帰っていいよ」と親が約束していたが、実際に日本に来たら帰らせてはくれなかった。」

翔が来日する前には「少し興奮していた。自分が海外で生活できるというワクワクした気持ちを感じていた」。また、「こんなに若いのに、海外に行けるんだ」と同じ村の子ども達からも羨ましがられたため、日本に来ることを楽しみにしていた。しかし、翔は「実際

に自分が日本に来てみたら全然違う」と感じた。具体的には、東京の街はどこに行っても人が多く、いつもざわざわした雰囲気を感じさせられた。また、日本人はずっと時間に追われているようで、生活リズムが速すぎる、と翔が日本に来てすぐ実感した。日本に来る前にアニメで観た楽しそうでのんびりしている日本の生活と、日本に来た後に実感した忙しい日々を送っている東京の生活とのギャップの大きさにショックを受けて、翔はこれまで暮らしていた中国の生活を恋しく思い始めた。

翔：「正直に言うと、日本の中学校に通った2年間は自分にとっては精神的に非常に苦しかった。東京の■■中学校に通ったが、僕以外はその学校には中国人が一人もいなかった。中国人が僕一人だけだった。」

翔は日本に来て間もなく東京にある公立の中学校の2年生に編入した。日本語が全く分からず、中国人の生徒も翔以外はいなかったため、言葉が通じなくて誰とも話せない学校生活はとてつらく感じていたという。「一つは言語（日本語）のこと、もう一つは日本が好きではなくなってきたこと」と、翔は日本に来たばかりの頃の心境を語った。日本が好きではなくなった理由を翔に聞いてみると、「日本に来たら中国の仲間たちに会えなくなった。でもそれ以上に、（日本語が全然できないから）、今後自分がどうやって日本で生きていくのか（すごく不安で）プレッシャーを感じていた」と答えた。このように、来日したばかりの翔は、日本という異文化、日本語という外国語、及び日本人という外国人に対して戸惑いを感じ、今後の生活に対する不安も抱いていた。

翔：「(中学校では)授業中はいつも寝ていた。もし先生に指名されたときは、「わからない」といつも答えていた。国語の試験は(自分の成績では)32点が最高点だった。数学なら80点か90点を取ることが多かったし、満点を取ることもあった。英語はいつも70点くらいだった。国語は2点、3点、5点、6点、最高点は32点だった。」

*：国語は文章が全然読めなかったから、できなかったの？

翔：「そう、全然読めなかった。32点を取れた試験も全部選択肢の問題だった。」

来日直後の翔は、日本語が全然分からなかったため、編入した中学校の授業はほとんど参加できず、成績にも大きな影響を及ぼした。特に、高い読解力と理解力が求められる国語の授業は全く理解できず、いつも低い点数しか取れなかった。

翔：「4月に中学に入学して、5月か6月に「子ども LAMP」に行ったんだけど、まあまあ楽しかったよ。実は「子ども LAMP」にいた頃は、勉強することに少し抵抗があった。早く授業を終えて、皆と一緒に遊びたかった。」

一方、翔のような日本の公立学校に在籍する、外国にルーツを持つ日本語の指導が必要な児童生徒は年々増えている（文部科学省令和4年度）。そして、翔が在籍していた中学校の管轄内では前述した「NPO 法人子ども LAMP」という学習支援活動が週に1回行われていた。翔が通っていた中学校には中国人の仲間がいなかったため、翔は中国人の子どもや支援者がたくさん集まる支援教室に行くことを楽しみにしていた。このように、翔が日本に来た直後は、日本語と日本文化に馴染めず、中国語と中国文化に積極的に接触しようとする様子が窺われる。

② 高校時代

*：なぜ定時制高校を選んだの？

翔：「一つの理由は、昼の高校に受からなかったからだ。■■■高校を一度受けたことがあるけど、受からなかった。他の昼の高校もよく知らないから、その後は直接夜の高校に進学した。その高校で多くの友達に出会えたし、自分も大きく変わった。つまり、性格がだいぶ明るくなってきた。もしその高校に行かなかったら、自分の性格がますますおかしくなっていたかもしれない。」

翔は日本の中学校に2年間通って、その後は一般の全日制高校に進学せずに、定時制高校に進学した。その理由の一つは、進学した定時制高校には中国人の生徒がたくさんいることを知っていたため、「特に深く考えずに、直接その高校にエントリーした」。翔は夜の高校に進学した後、同じ中国出身の友人がたくさんできて、そのおかげで性格も明るくなった。そこで、翔は来日直後の寂しい思いと精神的な不安から脱出し、「高校2年生になってから自分の精神状態が少し落ち着いてきた。少しずつ日本の社会や日本人のリズムに慣れて受け入れられるようになった」と、高校に入った後の変化を述べた。

翔：「高校の頃は半分勉強、半分アルバイトをしていた。1週間のうち6日間アルバイトをしながら学校に通っていた。朝6時から午後2時まではアルバイトをして、午後3時から夜9時までは学校に通っていた。そして、夜10時まで高校で仲間とバスケットボールをして、11時に家に着く、そのような毎日を繰り返していた。毎日5時間しか寝なかったけれど、とても充実していた。」

翔は定時制の高校に進学してから、高校の授業だけではなく、アルバイトも始めた。「僕はこれまでコンビニ、冷凍庫への運搬作業などいろいろなアルバイトを経験したし、自分から色々チャレンジしたいという気持ちもあった。」というように、翔はアルバイトをしながら社会勉強をし、自分の力を試そうと考えていた。また、「高校に進学した後は経済的には親に頼っていないし、頼りたくないのだ。その後もずっと自力でやっている」ため、翔

は高校の頃から学費と生活費を全てアルバイトで稼いでいた。このように、翔は、学業とアルバイトを両立させた高校生活を送っていたことが分かる。翔も、「高校からバスケットボールもやり始めて、その時に中国国内に彼女もできていたから、毎日とても充実した生活を送っていた」と楽しい高校時代を振り返った。

③ 高校卒業後から現在に至る

翔：「僕は中国と日本の二重国籍を持っていた。当時は中国国籍を放棄したという証明はできなかったから、中国政府は僕の中国への留学を受け入れなかった。あの頃は留学の資料を全部準備したのに、結局中国に戻れなかった。」

翔は、2021年3月に日本の定時制高校を卒業した後、両親から「三流大学でもいいから、絶対大学に入った方がいい」と勧められた。しかし、翔は、来日したばかりの頃から持っている「中国に帰りたい」という気持ちが相変わらず残っていた。そこで、生まれた時から所有している日本国籍を利用して、外国人留学生という枠で中国の大学に進学することを、翔が高校を卒業する時に両親が提案した。翔も一刻も早く中国に帰りたいと考えていたため、親の提案に賛同し、すぐに留学の手続きに取り掛かったという。しかし、実際に手続きを進めたら、「日本国籍しか持っていないという証明ができなければ、留学には行けない」と中国教育局に言われた。翔は、当時中国と日本の二重国籍を持っていたため、中国留学という計画は実現できなかった。

翔：「高校を卒業して約半年間も迷っていた。そして2021年の8月に自分で起業をしようと思った。その後は、会社を作るために毎日忙しくしていた。起業した最初の3ヶ月間、8月から11月までは赤字だった。」

翔は、中国留学で中国に帰る夢が実現できなかったため、続いて日本の大学進学を両親から勧められたが、最後は日本で起業することを決めた。起業する理由としては、翔は「自分の一番親しい祖父母に頑張っている姿を見せたい」「学校で勉強する教科書の知識はあまり頭に残らないし、体験しなければ全然頭に残らない」「経験は最高の先生」などと説明した。翔は、起業後は毎日仕事に追われているが、自分の生活現状に満足しているという。

翔：「日本にずっといるつもりはない。実は、日本の環境は僕には合わないんだ。憂鬱すぎるから。日本でたくさんのお金を稼いでから、中国に戻ってゆっくりしながら、田園生活を送りたいと考えている。日の出とともに働き、日没とともに休息するような生活は、実のところとても好ましく、憧れでもある。」

一方、今後の計画を尋ねたところ、翔は、「日本にずっといるつもりはない」と答えた。その理由は、現在住んでいる日本社会が自分に合わないことと、「自分の根は中国にあるから」と説明した。また、日本で起業するために日本国籍をそのまま残した翔は、「国籍は日本だけど、自分は中国人だと思っている」と、国籍とアイデンティティを別のものとして捉えている。

(2) 分析結果と考察

上記の翔のライフストーリーを踏まえて、翔の過去の留守児童経験の捉え方、及びその経験がその後の人生に与えた影響について考察を行う。

① 過去の留守児童経験に対する捉え方

a) 「留守児童は正常現象で、大したことはない」

翔は、14歳で日本に来るまでは、日本にいる両親と離れ離れになって福建省の祖父母と暮らしていた。翔を含め、祖父母はその他にも4人の留守児童の面倒も見ていた。このような、両親が海外に出稼ぎに行き、子どもを中国の親戚に預ける現象は翔の周りに多くあるため、翔は子どもの頃から「留守児童は正常の現象で、大したことはない」と捉えていた。特に、翔が育てられた福建省では農村留守児童の人数が10万人も超え、そのうち、翔のような中国にルーツを持ちながらも外国生まれか外国国籍や永住権を所有する「洋留守児童」⁶は2万人以上もいると言われている（中国僑聯2019）。このような「洋留守児童」は、親は長期間海外に出稼ぎに行くことで、親の不在の代わりに経済的には不自由のない生活を送ることができることが多く見られる。翔も、14年間自分の親と遠く離れて生活していたが、物質的には不自由のない子ども時代を送ることができていたと分かる。また、翔の祖父母は、責任を持って子どもを大事に育てていたため、翔も両親の不在の寂しさも抑えられたことが窺われる。このような生活環境で育てられた翔は、過去の留守児童経験を問題視せずに、「正常現象」として捉えていたことが考えられる。

b) 「もし僕が留守児童でなかったら、今の自分はない」

中国社会では、「留守児童 = 問題児童」という固定観念が強く、留守児童自身もその社会的イメージに囚われ、自分の留守児童経験を否定的に捉えていることが多い（陳2014、益満2018）。それに対して、翔は、「もしずっと両親と共に暮らしていたら、僕はおそらく温室の中の花になっていたかもしれない」、「両親のそばで育てられると、子どもがとても反抗的な人になってしまうか、あるいは勉強のマシンになって、勉強以外は何もできない人間になってしまう」と、自分の留守児童経験を正当化し、良い経験として意味付けている。また、「もし僕が留守児童でなかったら、おそらく日本には来なかっただろうし、自分の会社も作らなかっただろうし、今のような金銭感覚もなかっただろうと感じている」と

⁶ 外国生まれか外国の国籍や永住権を持っていても、中国の両親を持ち、発達段階途中で中国の祖父母や親戚のもとで育てられた18歳以下の子どもを指す。

いうように、翔は来日後の経験及び現在の存在も過去の留守児童経験と関連づけて捉えていて、過去の留守児童経験を肯定的に評価していることが読み取れる。対話を通して元留守児童が過去の留守児童経験を捉え直すことによって、子ども時代から現在、そして未来を捉え直し、自分を一貫した存在として認め、これまで拡散していたアイデンティティが確立されたことが明らかになった研究がある(周2021)。翔も、子ども時代の留守児童経験を積極的に捉え直し、その経験が現在及び未来の自分にもつながり、自己を作り上げるものであると主張している。しかし、翔は、現段階では「留守児童は正常現象で、大したことではない」と捉えていて、留守児童が構造的に作られたものであるという認識にはまだ至っていない。したがって、対話を重ねることで、翔が留守児童が生まれる社会構造を認識し、その社会構造を変えていく主体として自己形成していくことを期待している。

② 留守児童経験が来日後の人生に与える影響

a) 「留守児童は不安を感じやすい」

長期間両親の不在によって、留守児童は自分を取り巻く世界に対して不信感と不安感を持ちやすいと言われている(胡他2021)。翔は高校を卒業する直前に、約4年間も付き合っていた恋人と別れてしまった。翔は、「実は、留守児童には大きな欠点があると感じている。それは、人と付き合うときにとても不安を感じやすい」と語り、過去の留守児童経験と関連づけて捉えている。具体的には、「僕の場合は、特にはっきりその面が表れていて、自分が誰かと付き合うと、不安を感じてしまう。恋人ができると、自分の独占欲が強くて、不安になりやすく、常に相手のことを心配してしまう」というように、特に親密な関係を作る際に、相手が目の届く場所にいないと不安になる傾向がある、と翔は感じるという。親の出稼ぎは留守児童の身体上の健康にはほとんど影響を与えないが、留守児童の精神上的健康には大きな悪影響を与えていると言われている(呉2020)。翔の場合を見ると、経済的には全く不自由のない子ども時代を送ることができていたことが分かるが、親の長期的な不在によって心理的な面においては若干悪影響があることが窺われる。

b) 「留守児童は早く自立する」

近年、中国社会には、大学を卒業しても就職もせずに親と暮らし続けている若者、いわゆる「すねかじり族」が増え続けている(呉2017)。このような若者は1990年代以降に生まれ、一人っ子的場合が多い。そのため、生まれた時から、両親2人と祖父母4人に甘やかされ、「小皇帝」や「小公主」と呼ばれて大事に育てられている。このような家庭環境で育てられた子どもが成人になっても、経済的にも精神的にも完全に親に依存し、一人前になって社会に出ることができないと指摘されている(近藤2022)。一方、翔は、来日後に中学校を終えた後、定時制の高校に通っていた。高校の3年間は、学業とアルバイトを両立し、自分で学費と生活費を稼いでいた。また、翔は高校を卒業してから、親の期待に反して大学に進学せずに、日本で自分の会社を立ち上げた。上述した中国社会の「すねかじり族」とは正反対に、「高校に進学した後は経済的には親に頼っていないし、頼りたくないのだ」

というように、翔は早い段階から親に頼らないで自立しようと考えていた。その理由は、「これも自分が留守児童だったことと関連していると思う。留守児童はだいたい早く自立して、考え方もしっかりしている人が多い」と解釈し、自分の自立心を過去の留守児童経験と関連づけて述べていることが分かる。また、「両親のそばで育てられると、子どもがとても反抗的な人になってしまうか、あるいは勉強のマシンになって、勉強以外は何もできない人間になってしまう」というように、親不在の留守児童より、親がそばにいる若者のほうをより問題視していることが窺われる。このように、翔は、過去の留守児童経験があったからこそ、一般の子どもより早く自立し、苦労や困難を恐れずに前に進めることができると捉えていることが分かる。

おわりに

本稿は、日本に在住している元留守児童（翔）を取り上げ、ライフストーリーという研究方法を使って、翔の過去の留守児童経験の捉え方、及びその留守児童経験が来日後の生活に与える影響を分析した。翔は、長期間親と離れて暮らしていたが、楽しい子ども時代を送ることができ、過去の留守児童経験を肯定的に位置付けていることが分かった。一方、翔は経済的には全く不自由のない子ども時代を送ることができていたが、親の長期的な不在によって心理的な面においては若干悪影響を受けていることが窺われた。さらに、翔は、過去の留守児童経験があったからこそ、一般の子どもより早く自立し、苦労や困難を恐れずに前に進むことができると捉えていることが分かった。

本稿では、調査協力者として日本に在住している元留守児童1人のみを取り上げた。ゆえに、海外に在住する元留守児童研究におけるケーススタディの一つとして位置付けられる。また、本稿の調査協力者の翔が、正式に日本で生活し始めたのは14歳であった。日本に来た頃にはすでに高い中国語力を持っていた上、中国人というアイデンティティも確立されていた元留守児童である。さらに、日本に在住している元留守児童の中には、母語がまだ十分に習得されておらず、アイデンティティも確立されていない低年齢層のうちに日本に来た者もいる。低年齢期に来日した元留守児童についても、今後彼らのライフストーリーを分析し、過去の留守児童経験がその後の人生に与える影響を明らかにしたい。

中国国内の留守児童が出稼ぎ親の都合で、発達段階の途中に日本に来るケースは多い。彼らは日本語や日本文化が分からないため、外国人児童生徒として差別を受けることも多々あり、日本社会への同化要求に応じるために一方的に日本語と日本文化を学ぶという受動的な存在にさせられている。しかし、このような外国にルーツを持つ子どもが、将来日本社会の重要な構成員になり、多言語多文化共生を志向する日本社会を創造する取り組みの担い手となる可能性は高い。そのため、多様な言語と文化背景を持つ外国にルーツを持つ若者が、自ら社会に働きかけられるような主体性を獲得することは重要な意味を持つと考えられる。したがって、筆者がこれまで追求してきた中国国内の留守児童の主体性獲得の

成果を踏まえ、今後は共通の留守児童経験を持つ筆者と対話的問題提起学習に基づいた対話を通して、翔が主体性を獲得することを目指していきたい。

【参考文献】

日本語文献

- 尹曉珊（2019）「中国四川省における留守児童の暮らしと支援の課題—四川省における涼リャン山シャanyi（彝）族自治州の調査を手がかりにして—」『東洋大学大学院紀要』55、pp. 97-119.
- 岡崎敏雄（1997）「日本語・母語相互育成学習のねらい」『平成8年度外国人児童生徒指導資料母国語による学習のための教材』茨城県教育庁指導課
- 王石諾・三好恵真子（2022）「国際結婚で福島県に嫁いだ中国人女性の主体性とその形成過程—東日本大震災経験者のライフストーリーから読み解く—」『アジア太平洋論叢』24（1）、pp. 97-112.
- 鎌田文彦（2010）「中国における戸籍制度改革の動向—農民労働者の待遇改善に向けて—」『レファレンス』60（3）、pp. 49-65.
- 近藤大介（2022）『ふしぎな中国』講談社
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書房
- 周亜芸（2019）「中国元留守児童における主体性獲得のプロセス—対話的問題提起学習を通して—」『文明の科学』16、pp. 15-37.
- 周亜芸（2020）「対話的問題提起学習による主体性獲得のプロセス—一人の元留守児童を対象にして—」『華南研究』6、pp. 21-40.
- 周亜芸（2021）「過去の留守児童経験の捉え返しによる未来像の獲得—第二世代農民工の元留守児童を対象にして—」『文明の科学』18、pp. 1-18.
- 張嵐（2010）「『中国残留孤児』を育てた中国人養父母—ライフストーリー調査をもとに—」『年報社会学論集』23、pp. 106-117.
- 中井好男（2017）「滞日中国人のライフストーリーから見る自我アイデンティティの交渉と構築—なぜ永住権を目指して働き続けるのか—」『質的心理学研究』16、pp. 116-134.
- 益満雄一郎（2018）「深セン、絶望の出稼ぎ労働者 ネット賭博で借金漬け、路上生活」『朝日新聞』9月25日.
- 文部科学省「外国人児童生徒等教育の現状と課題」令和4年度文化庁日本語教育大会 https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/taikai/r04/pdf/93855301_06.pdf（閲覧日2023年6月15日）

中国語文献

- 陳娜娜（2014）「貧窮山区留守児童現状、問題及対策—以永泰県調研結果為例—」『福建教育学院学报』9、pp. 17-22.
- 胡戈揚・廖雪霏（2021）「農村留守児童心理安全感的現状調査—基于南昌市新建区3所農村小学留守児童の調査研究—」『教育觀察』10（31）、pp. 34-36+48.
- 紀韶（2016）「留守經歷影響新生代農民工就業質量」『人民論壇』18、pp. 76-77.
- 李曉敏・袁婧・韓福生・高文斌・羅靜・吳傑・李宝芬・尚文晶（2010）「農村留守經歷大学生心理行為與人際關係分析」『中国学校衛生』31（8）、pp. 954-956.
- 秦樹文・賈巨才・劉守義（2009）「農村留守児童生活現状与対策研究—以河北省尚義県、懷安県為例—」『河北北方学院学报』1、pp. 56-59.
- 全国婦聯課題組（2013）「全国農村留守児童、城鄉流動児童狀況研究報告」『中国婦運』第6期

- 汪建華・黃斌歆 (2014) 「留守經歷与新工人的工作流動農民工生產體制如何使自身面臨困境」『社会』5, pp. 88-104.
- 吳文雅 (2017) 「对当代高校畢業生“啃老族”的若干思考」『人才資源開發』18, pp. 73-74.
- 吳培材 (2020) 「父母外出務工对農村留守兒童身心健康的影響研究」『南方經濟』1, pp. 95-111.
- 溫義媛・曾建国 (2010) 「留守經歷对大学生人格及心理健康影響」『中国公共衛生』26(2), pp. 146-147.
- 謝東虹 (2016) 「留守經歷对新生代農民工工作流動的影響—基于2015年北京市数拠的实证檢驗—」『南方人口』3, pp. 1-9.
- 邢青 (2019) 「鄉村文化變遷視角下留守兒童問題研究」『教育理論与实践』39(16), pp. 27-30.
- 徐孟輝・唐秋月・嵇紅濤・張君冬・鄧春萍 (2017) 「对留守兒童生活現狀的分析与研究—以江蘇省宿遷市泗陽縣為例—」『改革与開放』22, pp. 80-81.
- 詹麗玉・練勤・王芳 (2016) 「留守經歷大学新生自我效能感社会支持及心理健康的相關性」『中国学校衛生』37(04), pp. 614-617.
- 鄭繼興・喬朋華・单保玲・廖雅哲 (2013) 「贫困地区農村留守兒童現狀調查及建議对策」『理論觀察』8, pp. 73-74.

映画の祭りは終わらない（下）

— アジアフォーカス・福岡国際映画祭の2006年から終わりまで —

The festival of movies will not ends : From 2006 to the End of the Focus on
Asia Fukuoka International Film Festival

八 尋 義 幸

YAHIRO Yoshiyuki

I アジアフォーカス・福岡映画祭2006年～ディレクター交代

佐藤忠男氏は2006年までアジアフォーカス福岡映画祭（以後、「アジアフォーカス」と表記）のディレクターを務めるのだが、個人的な意見で言わせていただければ、ディレクター交代はもう少し早くても良かったと思う。佐藤氏は1930年生まれなので、2005年では75歳という高齢である。日本映画学校の校長として映画人育成をしながら、海外のホテルや、移動の飛行機の中など、寸暇を惜しんで映画評論の原稿を書いておられた事を覚えている。映画に捧げた人生を目の当たりにしているような気がして、とても真似できないと思っていた。しかし気力はあっても、体は思うように動かなくなりつつあった。海外への映画探しの旅も次第に疲れが残るようになる。ディレクターを続ける限りはアジアフォーカス会期中だけではなく、実行委員会の会議等でも福岡市に来なければならない。アジアフォーカス会期中はホストとして、壇上の司会やゲストの見送りなど最大限の仕事をしていた。永久にディレクターを続けられるわけではないので、そろそろディレクター交代が良いのではと個人的には考えていた。福岡市もディレクター交代を意識し始めるのだが、そのためには責任ある立場の誰かが言わなければならない。この決断を下したのは山崎広太郎市長（当時）である。

山崎市長の時代は、バブル崩壊の時代である。福岡市も次第に緊縮財政に移行し、全体的に債務削減の方向だった。アジアフォーカスはアジアマンスの中核イベントなので、2005年段階では市からの負担金はあまり削減されていなかった。しかし市長もそろそろアジアフォーカスの予算に手を付けようと考えていたと思う。また山崎市長は映画業界のビジネスに関わる制度や、映画の著作権のあり方がうまく理解できないようであった。実行委員会席上で、映画会社の事がよくわからないと発言されたこともある。

ここから先は私の推測なのでそれを承知で読んでいただきたいが、山崎市長の判断に影響を与えたことがいくつかあると思う。まず2004年にアジアフォーカスと同時開催したア

ジア太平洋映画祭がある。この映画祭は各国の映画会社が自主的に映画を出品するので、わざわざ海外に映画を選びに行く必要はない。同じようにアジアフォーカスもアジアの映画会社から自主的に映画を提供する仕組みを作れば、何度も海外に行く必要はなくなる。またディレクターである佐藤氏一人が目立つのではなく、市民ボランティアの活用など、もっと市民参加を活発にし、市民のためのイベントにしたい、と考えたのではないかとも思う。前田秀一郎氏が市民ボランティアと作る福岡アジア映画祭では審査員を呼んで賞を出しており、これも念頭にあった可能性はある。

2005年のアジアフォーカス終了後、佐藤氏は山崎市長に結果報告をする。その席で、山崎市長は「アジアフォーカスでも賞を出したい」⁽¹⁾と提案する。もともとアジアフォーカスはノン・コンペティションを特徴としていた。佐藤氏は、映画があまり作られていないアジアの小さな国の映画も上映したいと考え、優劣を競う場にしないと考えていたからだ。しかし市長の希望ならと、佐藤氏は「東京国際映画祭に負けない盛大な賞にしましょう。」と答える。山崎市長は予算を増やさずに賞を出すことを考えていたので、まるで考えが合わないと感じ、ディレクター交代を指示する。佐藤氏は福岡市が選定し、アジアフォーカス実行委員会が任命したディレクターなので、主催者がディレクターを変えることは問題があることではない。福岡市は梁木靖弘氏を軸とした後任のディレクター選びに入っていく。アジアフォーカスの立ち上げにも1年を費やしているように、ここでも1年近い時間をかけて後任が決定されていく。だから2006年まで佐藤氏がディレクターを務める。

市長の課題であるアジアフォーカスの賞は「観客賞」となり、2006年から実施が決定する。観客賞は東京のFILMEX映画祭がすでに実施しており、それをまねたのかもしれない。1本の映画はアジアフォーカス会期中3回上映される。その最初の上映の時にだけ投票が行われ、観客は5段階評価で投票する。平均点が最も高い作品が観客賞になる。映画は20数本なので、2会場で1日4本上映すれば、3日後には結果がでる。映画祭会期中のゲストがまだ滞在している時に授賞式ができる。ほとんど経費をかけずにできるメリットと、観客が選ぶ賞なので、ノンコンペティションという映画祭の特徴も壊さない。賞を出しても賞金はでない。福岡市民が選んだ1番人気という名誉だけだ。しかしそれでは寂しいと、コダックから撮影用の生フィルムが副賞で提供された。だから2007年まで賞の名前は「コダック VISION アワード (福岡観客賞)」だった。その後「福岡観客賞」となる。コダックからの副賞提供を交渉して決めたのは佐藤氏である。さらに2014年から観客賞の第2位が「熊本賞」となる。熊本市が2012年に政令指定都市となったことで、福岡市と熊本市の連携としてアジアフォーカスが活用されたのだ。

2006年4月、福岡市は佐藤氏にこれまでのディレクターとしての仕事に感謝を述べ、新しいディレクターを擁立することを伝える。佐藤氏はこれを受け入れ、2006年がディレクターとして最後の年になることが決定する。2006年の上映プログラムはそれまでに比べや

⁽¹⁾ 筆者が当時佐藤忠男氏から聞いたこと。以後佐藤氏の発言も佐藤氏から直接聞いたことである。

や小粒だ。中国映画『胡同の理髪師』（06年 ハスチョロー監督）など素晴らしい作品はあるが、やはり最後は氣力が続かなかっただろう。

新しいディレクターに内定する梁木氏は、福岡市内在住で、九州大谷短期大学教授として演劇を教えていた。演劇が専門だが映画評も書いており、アジアフォーカスにも最初から企画委員として関わっていた。佐藤氏と共にベトナムや香港等に行き映画の選定にも関わっていた。アジアフォーカスに関する評論も初期は毎年書いていたが、1995年頃から佐藤氏の運営を批判し意識的に距離を置くようになる。アジアフォーカスの上映作品を含めたあらゆることが佐藤氏と事務局で決められ、企画委員は名ばかりであることが梁木氏の一番大きな不満だった。地元の間人が佐藤氏の下働きのように思えたのだ。⁽²⁾

佐藤氏が辞任することが決まった2006年6月から8月にかけて「アジアフォーカス・福岡映画祭検討委員会」が開かれる。委員は梁木靖弘氏のほか、西日本新聞文化部長の田代俊一郎氏や市民局文化部長の四宮裕司氏などで、私も委員の一人だった。佐藤ディレクター時代の反省点から始まり、来年度以降のアジアフォーカスをどうするかが主なテーマである。新しいディレクターが梁木氏であることは共通の認識だった。これでディレクターも地元人材になったことになる。福岡市側から見れば、この有識者会議で梁木氏を新ディレクターとして推薦された事になるだろう。新しいコンセプトとしては、アジアフォーカスをもっと普通の市民に分かりやすく伝える事、市民参加型のイベントの増加、幅広い交流事業の設定、アジアフォーカスのノウハウの市民との共有、地元の映画人育成などがあり、ディレクターだけでなくプロデューサーを置いてはといった意見や、ディレクターの任期の設定などいろいろな課題が議論された。⁽³⁾

そして2006年のアジアフォーカスが始まる。概要は下記の通りで、市からの負担金は1800万円ほど減少する。⁽⁴⁾ 観客数等はアジアフォーカス30周年を記念して作成された「アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991-2020」（以後、「30周年記念誌」と表記。）から引用する。

アジアフォーカス・福岡映画祭2006

会期：9月15日（金）～9月24日（日）（10日間）

会場：ソラリアシネマ1、エルガーラホール、西鉄ホール、NTT 夢天神ホール

上映作品：15カ国・地域から47作品（上映作品25本）

観客数：アジアフォーカス・福岡映画祭2006 13,480人

協賛企画など 3,293人 合計 16,773人⁽⁵⁾

⁽²⁾ 梁木靖弘「アジアに何を投げ返すか」村山匡一郎・出口丈人／編（1995）『CINEMA 101 創刊号』映像文化連絡協議会、73ページ。

⁽³⁾ 委員会の議事録は残っていないので、筆者の記憶による。

⁽⁴⁾ 以後、アジアフォーカスの予算については特に出典を記述しない場合、筆者のメモや記憶によるもの。

⁽⁵⁾ 「30年を振り返って 1991年～2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榎田大成・高見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳／編（2021）『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991-2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、46ページ。

この年は上映作品にアジア・パノラマ等の表記がない。アジアフォーカスの上映作品数は25本。観客賞に選ばれたのはインドの『私はガンディーを殺していない』（2005年 ジャヌ・バルア監督）だった。上映会場で観客の反応などを見ていた私は、日本映画のドキュメンタリー『蟻の兵隊』（2005年 池谷薫監督）を観客賞と予想していたのでちょっと驚いた。そして『私はガンディーを殺していない』が受賞するのであれば観客賞の設定は良かったのではないかと思った。福岡の観客は良い映画を選んでくれる。信頼できると思った。

アジアフォーカス終了後佐藤ディレクターは辞任するのだが、辞任に関する記者発表などはされていない。佐藤氏はアジアフォーカス会期中にゲストと会食を開き、今年がディレクター最後の年であることを伝えている。何人かの監督は涙を流して感謝を述べた。佐藤氏の辞任はアジアフォーカス会期中、9月23日の朝日新聞で下記の様に報道される。

アジアフォーカス・福岡映画祭の顔として知られた映画評論家の佐藤忠男さん（75）が、今年限りで同祭ディレクターを退くことが22日分かった。高齢が理由という。（略）佐藤さんは「年7回ほど海外に行っていたが、体がきつくなってきた。培ってきた人脈やノウハウを大事にしていけば、発展していけると思う」と話している。⁽⁶⁾

そして10月6日の朝日新聞に、佐藤氏は「アジアの秀作求め16年 福岡映画祭ディレクターを終えて」という文章を寄稿している。辞任の理由は下記のように書いてある。

アジアへの理解と友好を深めることを市政の柱のひとつとした桑原敬一前市長の熱意に心を動かされて引き受けたものだった。そして規模は大きくはないが内容が充実しているという点では理想に近いものができたと思う。やれるだけやって優秀な後継者も育ったと思うので、ここで辞めることにした。（略）アジアの映画人が他のアジアの映画を見ることで互いに影響し合うようになるということは私たちが福岡でめざした理想のひとつであり、かなりいいところまでいけたと思う。その証拠に、映画の上映後のトークでは、しばしばゲストの他のアジアの国の映画人からの質問や福岡在住のアジア諸国の人々の発言が飛び交って国際色を豊かにしてきた。国際映画祭はそういう知的な国際交流の場であるべきだし、それでこそ、アジアに開かれた都市の市民の楽しみになり得るのだと思う。⁽⁷⁾

さらに朝日新聞は2006年12月16日の紙面で次期ディレクターが梁木靖弘氏に内定したことを報じている。⁽⁸⁾ 梁木氏の2007年に向けての映画選定の仕事は当然2006年から始まって

⁽⁶⁾「福岡映画祭の「顔」、今年限り 評論家・佐藤忠男さん退任 今後にエール」『朝日新聞』、2006年9月23日、朝刊、34ページ。

⁽⁷⁾「アジアの秀作求め16年 福岡映画祭ディレクターを終えて 佐藤忠男」『朝日新聞』、2006年10月06日、夕刊、3ページ。

いる。またこの年の福岡市長選で吉田宏市長が誕生する。

II アジアフォーカス・福岡国際映画祭のはじまり～2007年

佐藤氏がディレクターを辞任し、梁木氏が新しいディレクターとなる。ただし5月のアジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会での承認が必要なので、正式なディレクター就任は2007年の5月である。名称もアジアフォーカス・福岡映画祭からアジアフォーカス・福岡国際映画祭（以後「アジアフォーカス」と表記）となった2007年の概要は下記の通りである。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2007

会期：9月14日（金）～9月24日（月・休）（11日間）

会場：ソラリアシネマ1、エルガーラホール、西鉄ホール、

上映作品：16カ国・地域から51作品（泣くな、踊れ、アジアの女性たちよ！4本、アジアの新作・話題作13本、ディーパ・メータ監督特集～ディアスポラのアジア3本、日本の民衆史3本、福岡フィルムコミッション支援作品2本、釜山アジア短編映画祭6本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2007 13,234人

協賛企画など 3,044人 合計 16,278人⁽⁹⁾

上映作品は協賛企画を除くと短編映画を含めて31本。「泣くな、踊れ、アジアの女性たちよ！」といったキャッチーなタイトルは佐藤氏がディレクターの時代はなかったものだ。「日本の民衆史」は日本のドキュメンタリー映画の特集で、日本映画の特集が入ったのも梁木ディレクターになってからである。また「福岡フィルムコミッション支援作品」が2本、「釜山アジア短編映画祭」が6本と盛沢山の企画である。全30回のアジアフォーカスでこの年が最も企画数が多い。新生アジアフォーカスを思わせる。そしてそれまで実行委員会の下部組織だった企画委員会はこの年から廃止となる。

2007年のアジアフォーカスのカタログに、梁木氏の肩書は Director General と表記してある。佐藤氏の後を継いだということだ。しかし2008年には Director、2009年には Festival Director と変わっていく。作品選定をしながら広報や運営など幅広くかかわっていく梁木ディレクターのポジションは、最終的にはフェスティバル・ディレクターに落ち着く。これは福岡市の事務局側の発言力が増したことになる。

新ディレクターとして西日本新聞の取材を受けた梁木氏は、2007年8月31日の記事で今後のアジアフォーカスについてこう語る。

知られざる映画を紹介し『これを見ればアジアが分かる』と啓蒙する時代は終わりつ

⁽⁸⁾「福岡映画祭の「顔」、梁木靖弘さん内定」『朝日新聞』2006年12月16日、朝刊、34ページ。

⁽⁹⁾前掲「30年を振り返って 1991年～2020年上映作品一覧」、48ページ。

つある。アジアは、ものすごい勢いで変容を続けています。その多様な姿を切り取った作品から、“今”のアジアを感じ取ってもらうのが映画祭の使命です。そして、福岡から何を投げ返していくかを考えていきたいと思います。⁽¹⁰⁾

新任の梁木氏は佐藤氏と違う作品選定を強く意識する。2007年のカタログに映画の選定に関してこう書いている。

いまではすぐれたアジア映画は一般館で封切られるようになり、映画祭だけがアジア映画の窓口であるという時代は終わった。だが、日本で封切られないよい作品がアジア各地にあることも事実で、啓蒙的な役割の必要性がなくなったわけではない。しかし、後進地域の映画を紹介するという古い方法論だけでは、現在のアジアを理解することはできないのではないか。むしろ、成長著しいアジアの友人たちの意識は、日本人を追い越し、先行しているのではないだろうか。アジアの一員として、アジアとの複眼的なつながり方を模索していかねばなるまい。アジアフォーカス・福岡国際映画祭は、アジアから何を受け取り、何を投げ返していこうとするのか。新ディレクターとして、これからはそれを考えていきたいと思う。(略) 内容面では、市民の方々が見たい作品を選択しやすいように、何を見せたいのかというコンセプトを明確にした。⁽¹¹⁾

さらに梁木氏は西日本新聞2007年9月11日と12日の2日にわたって掲載された「アジアフォーカス2007への招待」で次のように書いている。

この十年、状況はがらりと変わった。かつてローカルな関心しか呼び起こさなかったアジア諸国の状況は、インドや中国の政治経済から、過激派のテロリズムまで世界情勢の鍵を握るようになったといってもいい。そういう国で作られる映画が、面白くないわけではない。ダイナミックに変化するアジアのいまを、もっとも敏感に反映しているのが映画だと思う。(略) 今日のアジアを知らなければ、明日の福岡はないと思う。そして、アジアを知る最良の窓口が、映画である。それぞれの国の一本一本に、いまのアジアの空気が満ちあふれている。活きのいい映画を発見し、福岡の大きさに解き放つ。アジアの今を、なにより、感性で感じ取ってもらう。それがアジアフォーカス・福岡国際映画祭の使命だと思う。⁽¹²⁾

⁽¹⁰⁾「聞きたい 求められるアジアフォーカス像は」『西日本新聞』、2007年8月31日、朝刊、7ページ。

⁽¹¹⁾ 梁木靖弘「アジアフォーカス・福岡国際映画祭2007～アジア映画を掘り下げながら、解き放つ～」、梁木靖弘／編(2007)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭2007 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、4ページ。

⁽¹²⁾「アジアフォーカス2007への招待状 上 多くの視点で全体に迫りたい」『西日本新聞』、2007年9月11日、朝刊、15ページ。および「アジアフォーカス2007への招待状 下 発見し、感じ、未来へ架ける」『西日本新聞』、2007年9月12日、朝刊、13ページ。

梁木氏のかなり気合の入った文章である。作品選定基準は佐藤氏のようにシンプルな言い方ではなく、多少文学的な表現であるが、“アジアの今”を感じさせる映画を選ぶということに要約できるだろう。また9月8日の西日本新聞に、アジアフォーカス実行委員会事務局長の四宮氏がインタビューに答えた記事がある。

アジア映画の熱心なファンや、アジア好きの人にとっては定着した行事になった。その一方、市民や普通の映画ファンの心に響く映画祭に育っていない面もある。アジアの経済、人、文化の交流が以前にも増して盛んになり、距離的、精神的近さが増す中、これまで通り、単にマニア受けする映画で、文化や生活を紹介するスタンスでいいのかと感じていた、(略) 今年は「新しいその国を見よう」と新鮮な目で映画を選び、監督も若返った。今までにない青春映画や音楽にこだわった映画もある。さらに、市民へのすそ野を広げようと、イベントとして映画講座やフォーラム、シンポジウム、プレ上映会など、参加型の行事を積極的に展開中だ。⁽¹³⁾

佐藤氏の作品選びは、どちらかといえば“変わらないアジア”だったと思う。時代が変わっても変わらない人の優しさや美徳が前面に出る作品が多かった。一方、梁木氏はジャーナリスティックな視点で、今のアジアを市民に見せようとしている。四宮氏の記事はこれまでの佐藤批判をまとめたような内容である。確かにそれまでは佐藤氏一人が前面に出て福岡市を引っ張っていた感はあるので、もっと様々なところに市民参加を促すという方向性へのシフトである。

梁木氏は福岡市在住なので、事務局と定期的に会合が持てるようになる。また梁木氏は映画祭広報のためのビジュアルにも注文を付け、専門のデザイナーを起用するが、これはなかなか上手くいかなかった。それ以前は、アジア美術館の招待で福岡市に滞在していたアジアのアーティストにメインビジュアルを依頼することが多かった。梁木氏は現代的なデザインを期待したのである。上手くいかなかったのは、スケジュール調整などイベントを仕切るディレクターとしての経験不足のためと思われる。梁木氏は1991年に一度上映会場の運営を経験しているが、以後は評論活動が主なので、役所の組織であるアジアフォーカスの事務局を指示する業務は初めてだったのではないだろうか。

梁木氏は作品選定のため、佐藤氏が行っていなかったオランダのロッテルダム映画祭にも行くようになる。また海外の映画祭に参加するのも必ずしも梁木氏ではなくなる。筆者は2007年12月、アジアフォーカス事務局の依頼で来年度の映画選定のため、インドネシア、ジャカルタの映画祭に参加した。一人で海外の映画祭に参加したのはこの時が初めてだった。1週間の滞在で20数本を見たのだが、めばしい作品に出会わず、現地の映画祭事務局に頼んで、DVDでインドネシア映画を見せてもらった。結局見た作品から、気に入った4

⁽¹³⁾「アジアの空気を感じて」『西日本新聞』、2007年9月8日、朝刊、25ページ。

本の作品のDVDを現地DVDショップで購入して、日本に持ち帰り梁木氏に手渡した。第1候補から第4候補まで私なりの順番を付けたのだが、残念ながら梁木氏の眼鏡にかなう作品はなかった。しかし第2候補とした作品は翌年の東京国際映画祭で上映された。第1候補とした作品の監督は、ジャカルタで初めて名前を聞いた監督だった。当時まだ若かったがとてもセンスを感じさせた。いまでは大変有名な監督になっている。

映画祭壇上に上がる司会者や通訳も福岡の人材が多く起用されるようになる。佐藤ディレクター時代、佐藤氏は1日4回ある上映のゲストの紹介と質疑応答をすべてこなしていた。上映会場はもう一つあるので、最低でもう一人司会者が必要である。そのもう一人の司会者を最も沢山受け持ったのが私だと思う。私は総合図書館の仕事もあるので、他に福岡アジア美術館学芸員の松浦氏やアジアフォーカス事務局の山口氏なども司会をしていたが、私は当時自分の事を佐藤氏の裏番組とよく人に言っていた。別に悪口ではなく、映画人として大先輩の佐藤氏の裏番組なら光栄なことで、どちらかといえば自慢である。いずれにせよあまり多くの司会担当者がいたわけではない。私は1日4回の上映で3回司会をすることが多かったが、日本語字幕付きの映画を見るのは大体観客と一緒に見ることになる。ゲストを紹介して、映画を見て、質疑応答を行う。これを3回行うのはかなり疲弊する。映画を見ている時は、観客とどんな質疑応答をするかを考えながら見ているので楽しめない。ゲスト第一だから仕方がないのだ。映画は事前に見ているとはいえ、佐藤氏が1日4回の司会をすべて担当していたのはすごいと思う。一方人材育成のため、多少のミスは許容するつもりで人に任せるのも一つのやり方ではある。プロの司会者は予算を要するので、梁木氏はそれまでアジアフォーカスに関わっていた多くの福岡の人材を司会者に起用した。おかげで私はたまに司会をするだけでよくなった。

通訳も地元の人が起用されることが増えた。佐藤ディレクター時代は、映画の字幕翻訳をした人がそのまま通訳することが多かった。映画の内容をよく知っているので安心して任せられるのだ。しかし人を育てるならゲストや観客に少しの我慢をお願いすることになる。あまりに不慣れな通訳で、観客からクレームもあったと思う。

ボランティアも数多く起用された。ゲストの案内や会場の整理など様々な場所でボランティアは活躍できる。さらにはアジアフォーカス会期中以外でも映画講座を開催するなど、ディレクターと事務局の市民参加を促す試行錯誤はその後も続いていく。

Ⅲ アジアフォーカス・福岡国際映画祭2008年～2010年

アジアフォーカスの2008年から2010年の概要は下記の通りである。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2008

会期：9月12日（金）～9月21日（日）（10日間）

会場：ソラリアシネマ1、エルガーラホール、西鉄ホール、

上映作品：21カ国・地域から69作品（トルコ・シネマ・ルネッサンス4本、上映作品19

本、ディアスポラのアジア～第2章～「李安」監督3本)

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2008 14,379人

協賛企画など 5,231人 合計 19,610人⁽¹⁴⁾

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2009

会期：9月18日（金）～9月27日（日）（10日間）

会場：西鉄ホール、エルガーラホール、福岡国際会議場

上映作品：18カ国・地域から47作品（上映作品20本、福岡—釜山友情年記念 韓国映画コレクション3本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2009 14,471人

協賛企画など 4,205人 合計 18,676人⁽¹⁵⁾

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2010

会期：9月17日（金）～9月26日（日）（10日間）

会場：ソラリアシネマ、エルガーラホール、福岡国際会議場

上映作品：18か国・地域から41作品（上映作品21本、20周年記念 マジド・マジディ 監督特集9本、20周年記念 福岡観客賞受賞作品上映会4本、NETPAC 賞受賞日本映画特集5本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2010 13,917人

協賛企画など 6,404人 合計 20,321人⁽¹⁶⁾

「アジアの新作・話題作」という括りは2007年の1年だけ使用され、以後は「上映作品」としか表記されない。2008年はアジアフォーカス初のトルコ映画特集である「トルコ・シネマ・ルネッサンス」が開催される。また福岡大学人文学部東アジア地域言語学科が開設10周年を迎え、アジアフォーカスと共催でシンポジウム「ディアスポラのアジア～第2章～アジア映画のキメラ李安（リー・アン）監督を語る」を開催する。

子育て世代の映画鑑賞を手助けする託児サービス、日本語字幕を読むことが難しい小学生にボランティアの声優がセリフを吹き替えるボイスオーバー上映なども行われる。どれも若者や、子ども等を観客として呼び込む取り組みだが、長くは続かなかった。ただし福岡大学人文学部東アジア地域言語学科の企画は、2009年から協賛企画「福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会」として2019年まで続く。これは元アジアフォーカス企画委員であった福岡大学の間ふさ子教授（当時）によるものである。

2008年は観客賞を受賞したパキスタン映画『神に誓って』（2007年 ショエーブ・マンズール監督）が上映されたことが作品的には最大の成果だと思う。アジア各国の映画を上映してきたアジアフォーカスだが、海外との合作ではないパキスタン映画の上映は『神に誓って』が最初である。2009年は観客賞となったベトナム映画『きのう、平和の夢を見た』

⁽¹⁴⁾ 前掲「30年を振り返って 1991年～2020年上映作品一覧」、50ページ。

⁽¹⁵⁾ 同前、52ページ。

⁽¹⁶⁾ 同前、54ページ。

(2009年 ダン・ニャット・ミン監督)の他にも、インドネシア映画『虹の兵士たち』(2008年 リリ・リザ監督)やマレーシア映画『タレントタイム』(2008年 ヤスミン・アフマド監督)など他の年なら観客賞を受賞してもおかしくない作品が並んでいる。良質な娯楽作からインディペンデント作品まで、幅広い映画を楽しめた。

2009年はアジアマンス20周年であり、アジアフォーカスのオープニング式典は2003年に完成している福岡国際会議場が使われた。福岡国際会議場はコンベンション都市を目指す福岡市の中核として機能し、以後すぐ近くのマリンメッセ福岡と一緒に福岡市のMICEを担っていく。この年はアジア太平洋フェスティバルや福岡アジア文化賞と共同で事業を開催、アジアマンスの三大イベントが揃い、お祭りムードを醸し出す。私は国際会議場のレッドカーペットを使ったオープニングを見に行けなかったのが残念だった。

この年はソラリアプラザの改装の影響で、メインの上映会場が西鉄ホールになる。上映プログラムとしてはこの年は企画数が少ない。1つだけ、福岡市が行政交流都市として関係を結ぶ釜山市との記念事業として、「福岡—釜山友情年記念 韓国映画コレクション」と題して3本の韓国映画が上映されている。

協賛企画として「福岡インディペンデント映画祭2009」が始まり、アジアフォーカスの最後まで開催され、2023年現在も続いている。協賛企画がこの頃からさらに増え、2010年には「台湾映画祭2010」「東アジア映画フェスタ2010」⁽¹⁷⁾が始まる。これも2023年現在も継続している。これらの協賛企画には梁木ディレクターは関わらない。アジアフォーカス事務局はこれらの企画に広告費を出し会場費の減免を行った。予算的には大きな支出をせず、市民による自主的な映画上映をサポートする試みである。

2010年はアジアフォーカス20周年である。20周年記念として開催されたのは「20周年記念 マジド・マジディ監督特集」と「20周年記念 福岡観客賞受賞作品上映会」である。マジド・マジディ監督は、アジアフォーカスに新作を作るたびに招待されていたイランの監督だが、世界的に有名になった後も福岡には特別な愛着を持って来ていた。特集する価値がある監督だが、上映作品9本のうち8本はすでに総合図書館に収蔵されていた。観客賞受賞作品の特集もすべて総合図書館の収蔵作品である。すでに総合図書館で上映は行っていたので、残念ながら観客から見て映画が新しいわけではない。総合図書館に収蔵された映画の有効活用だが、20周年としての企画のインパクトは薄い。これは減少していく予算の中で、プログラムをどうするかという工夫が必要となっていたからである。2010年の市の負担金は7200万円。最大で1億5千万円近かったアジアフォーカス実行委員会予算が、企業協賛金や文化庁の助成金をあわせても1億円を割り込むようになっていた。

アジアフォーカス20周年の歩みについて、梁木氏は2010年9月3日読売新聞のインタビューに答えている。

⁽¹⁷⁾ 2015年から「福岡アジアフィルムフェスティバル」となる。

「困っています」が、第一声だった。アジアの今を考えるための「地図」のようなものを示すことが映画祭の大きな役割だった。しかし、近代化し、グローバル化し、国も人々も映画作りも変化するなか、「作品を並べたところで、アジアの大きな流れが見えてくる時代ではなくなってしまった」からだという。（略）では、「地図」を描きがたい時代に、どうやって現在地を確かめればいいのか。「一人ひとりが、個々の作品と向き合い、自分なりのアジアを見つけていくしかない」と語る。⁽¹⁸⁾

梁木氏はインタビューで答えた内容をさらに詳しく、2010年のアジアフォーカスのカタログにこう書く。

すべてがめまぐるしく変貌してゆくのに、わたしたちは、どこにも足場を見つけれないでいます。足元が溶けてなくなるような不安にさいなまれるそんな時代に、映画祭に必要とされるのは、アジア映画の漠然とした傾向を指摘することではないでしょう。ただ消費されるための作品を楽しむのではなく、その土地と、時代と、人間を描く作品を注意深く見守ることではないでしょうか。また、注意深く見守られるために精魂込めて作られた作品を見ることによってのみ、わたしたちはアジアとの関係を再認識できるのですし、その注意深く見る・見られるという相互関係を通して、わたしたちは確実な足場を見つめることができるでしょう。そのようなアジア認識の足場を見つめるための手がかりとなる作品を、参照点（リファレンス・ポイント）としての映画と呼べると思います。アジアフォーカスのような地方の小規模な映画祭の役割のひとつは、おそらく、映画界や映画産業の内部の論理に取り込まれることなく、距離を置きながら、アジアにとって参照点となる作品を捜し出すことにあります。⁽¹⁹⁾

2010年の上映作品は、アジアフォーカスで初めてのホラー映画『禁断の扉』（2009年 インドネシア ジョコ・アンワル監督）や、実験映画といっても良い『ありふれた話』（2009年 タイ アノーチャ・スウィチャーゴーンポン監督）など、バラエティに富んだ作品構成である。当時香港やインドネシアではホラー映画が大流行しており、『禁断の扉』はそういった流れを紹介したことになる。そしてホラー映画はこの後もしばしば上映プログラムに加えられるようになる。一方、2007年のアジアフォーカスの時のようなアジアを括るテーマが見つげにくくなっていたのである。「精魂込めて作られた」映画を紹介するが、映画業界とは距離をおく。最先端の情報を持っているのは業界なので、ディレクターは難しい課題を自らに課している。だから映画業界とはあまり関係のないインディペンデント系の作品に活路を見出そうとしたのかもしれない。

⁽¹⁸⁾「福岡国際映画祭 20年の成果 アジア映画から日本知る」『読売新聞』、2010年9月3日、夕刊、7ページ。

⁽¹⁹⁾梁木靖弘「参照点（リファレンス・ポイント）としてのアジア映画を求めて」梁木靖弘／編（2010）『第20回アジアフォーカス・福岡国際映画祭 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、7ページ。

そして2010年の福岡市長選で、高島宗一郎市長が誕生する。

IV アジアフォーカス・福岡国際映画祭2011年～2012年

アジアフォーカス2011年～2012年の概要は下記の通りである。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2011

会期：9月16日（金）～9月25日（日）（10日間）

会場：T・ジョイ博多、JR九州ホール、JR博多シティ大会議場

上映作品：13か国・地域から32作品（上映作品21本、荻上直子監督特集5本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2011 15,655人

協賛企画など 8,571人 合計 24,226人⁽²⁰⁾

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2012

会期：9月14日（金）～9月23日（日）（10日間）

会場：T・ジョイ博多、JR九州ホール、JR博多シティ大会議場など

上映作品：15か国・地域から37作品（上映作品17本、アカデミー賞受賞監督アスガー・ファルハディ全作上映5本、〈アグリシネマ〉農業と映画3本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2012 15,980人

協賛企画など 7,197人 合計 23,177人⁽²¹⁾

2011年3月、九州新幹線が鹿児島まで延伸し、併せて博多駅の商業施設の大規模なリニューアルが行われた。アミュプラザや博多阪急が開店し、その賑わいは福岡市に新しい中心地が生まれたようだった。アミュプラザにはシネマコンプレックスのT・ジョイ博多オープンする。2年間だけだが、T・ジョイ博多がアジアフォーカスの会場になる。シネコンの2スクリーンを使うので、観客は移動を伴わずに映画を見ることができるとある。観客賞の発表などは隣接するJR九州ホールで行われた。T・ジョイ博多はバックヤードに会議室等を持ち、会期中のアジアフォーカス事務局もシネコンの中に作ることができた。ゲストは博多駅近隣のホテルに宿泊した。天神にある本庁の事務局から遠いのが欠点だが、シネコンの使い勝手の良さは便利だった。

2011年は協賛企画を含めた観客数が過去最高となるが、これは協賛企画の観客数が増えたことが大きく影響している。上映作品としては何といてもアカデミー賞を受賞したアスガー・ファルハディ監督の『ナデルとシミン』（2011年 イラン）⁽²²⁾で、予想通り観客賞を受賞した。観客賞の予想は毎年の私の密かな楽しみだったのだが、第一候補で的中したのはこの年が初めてだった。

この頃のアジアフォーカスの上映映画は35ミリフィルムとHDCAMと言われるデジタル

⁽²⁰⁾ 前掲「30年を振り返って 1991年～2020年上映作品一覧」、56ページ。

⁽²¹⁾ 同前、58ページ。

⁽²²⁾ アジアフォーカス終了後、日本では『別離』という題名で劇場公開される。

ビデオが混在していた。インディペンデント系の作品はデジタルビデオで作成されていたからだ。世界の映画祭でもデジタルビデオによるインディペンデント系の作品が増える。デジタルカメラはフィルムカメラに比べれば安価で、撮影も編集もしやすい。世界中どこでも映画が作れる。そんな時代が来ていた。アジアフォーカスも2013年には全ての上映作品がデジタルになり、2014年には全ての作品が劇場用映画の世界共通のデジタルフォーマットである DCP に変わる。フィルムからデジタルへの移行が急速に進んでいた。劇場の上映設備がDCPに置き換わり、35ミリフィルムの映写機が廃棄され、フィルム上映ができなくなっていく過渡期だった。設備投資ができないミニシアターは閉館を余儀なくされる。2009年にはシネテリエ天神が休館。2011年にはアジアフォーカスのメイン会場だったソラリアシネマが閉館となる。

2012年はアジアフォーカスのオープニングが市役所西側のふれあい広場で行われた。高島市長は元テレビアナウンサーなので、自ら進行役となり、ゲストとして招待された映画評論家のおすぎ氏等とステージ上でトークショーを行った。ゲストはレッドカーペットを歩いて登壇し、オープニングの後には韓国映画『ダンシング・クイーン』（2011年 イ・ソクタン監督）の上映もあったが、この日は小雨であり万全の状態とはいかなかった。2011年のアジアフォーカスのオープニングはT・ジョイ博多の劇場で行っている。それ以前もオープニングはアジアマンス20周年を除き、映画館で行うのが通例だった。高島市長は釜山国際映画祭を視察しており、華々しい国際映画祭の様子に影響を受けたように思う。この年以後、アジアフォーカスはレッドカーペットによるオープニングが定着する。

またこの年、市役所内で韓国映画をもっと沢山見られるようにするプロジェクトが立ち上がるが、これはうまくいかなかった。2012年は前年アカデミー賞を獲得したアスガー・ファルハディ監督の過去の全作品5本が上映された。東京国際映画祭が企画してもおかしくないプログラムだろう。アジアフォーカスの会場はT・ジョイ博多で続くように思われたが、2013年から会場はキャナルシティ博多のユナイテッド・シネマ キャナルシティ13に変わる。

2012年のアジアフォーカスが終わった後に私は地元の雑誌記者からインタビューを受けた。アジアフォーカスに対しての見解を求められたのだが、その記者は、T・ジョイ博多はアジアフォーカスの会場になるのを辞めたいと思っているというスタンスだった。基本的に東宝や東映等の大手の映画館は映画祭をあまり歓迎しない。映画は観客が入るかどうかは上映してみないとわからない。だからプログラムに融通が利くシネマコンプレックスというスタイルは画期的で、デジタル映画がそういった上映スタイルにとっても相応しかった。利益を最大化できるのである。アジアフォーカスの時期は秋のシルバーウィークに当たっており、映画会社は若者客をターゲットとした興行的に成功が見込める映画を準備している。しかしアジアフォーカスは先に一番良い日を予約するので、アジアフォーカスを開催する2スクリーンは融通が利かなくなる。会場のレンタル料は当然らっているので損はしないが、もっと収入が上げられたのではという気になることもある。「若者で満席の

映画館の隣で、大学の先生が選ぶ、誰も知らない国の良くわからない映画が上映されている」⁽²³⁾ というわけである。アジアフォーカスの観客は高齢者が多い。真面目にアジアを学ぼう、もしくは映画を芸術と考える観客が多いからだ。良くわからない映画というのは、映画を見ない人から出るよくある批判の一つなので、個人的にはあまり気にならない。全部満席とはいかないが韓国映画を中心に観客も良く入っていたからだ。劇場としては、劇場のスタッフではないアジアフォーカス事務局員が、10日間だけだが我がもの顔で劇場内をうろうろすることが嫌なのかもしれない、と思った。現場の空気というものなのかもしれない。これは会場をあちこち変えることのデメリットだろう。

以前アジアフォーカスを開催していたソラリアシネマは2012年東宝系劇場として再開していたが、東宝は劇場を貸してはくれない。2013年からアジアフォーカスの会場はチャンネルシティに変わるのだが、事務局の運営にはプラスである。天神の本庁から近いし、レッドカーペットによるオープニング・セレモニーもそこで行うことができ、テレビ的な演出もしやすい。チャンネルシティにはホテルもあり、オープニングパーティやゲストの宿泊、移動も便利である。2013年から最後の2020年まで8年間、アジアフォーカスの上映会場はユナイテッド・シネマチャンネルシティ13に落ち着く。これは街づくりの映画祭から、イベントとしての映画祭への転換だった。

2012年のカタログで梁木氏は、国際映画祭の役割は「国威発揚」と「マーケット」の2点とし、次のように書く。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭は、権威づけもしませんし、マーケットでもありません。強いていえば、最先端がどこにあるのかを示す高性能アンテナ機能を目指しているといえいいでしょうか。⁽²⁴⁾

アジア映画の最先端を探す、芸術映画への志向がディレクターに強まっていく。

2012年4月組織改革で福岡市の本庁に経済観光文化局が誕生する。アジアフォーカス事務局も市民局文化振興課から経済観光文化局コンテンツ振興課に移される。博物館や美術館も教育委員会から経済観光文化局に移管され、文化を用いた観光・経済の発展が目標となる。観光資源となる魅力の再発見と磨き上げ、緑と歴史・文化のにぎわいの拠点作り、交流がビジネスを生む MICE 拠点の形成、国内外への戦略的プロモーションの推進などいくつかのキーワードがあるが、⁽²⁵⁾ アジアフォーカス事務局も対応しなければならない。2014年からマーケット機能を持つ、「ネオ・シネマップ福岡」がアジアフォーカスと並行して開

⁽²³⁾ これは記者の発言だが、筆者の記憶によるもの。

⁽²⁴⁾ 梁木靖弘「アジア映画のアンテナとして」梁木靖弘／編(2012)『第22回アジアフォーカス・福岡国際映画祭[公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、7ページ。

⁽²⁵⁾ 福岡市総務企画局企画調整部／編(2013)『政策推進プラン(第9次福岡市基本計画 第1次実施計画)』福岡市総務企画局企画調整部、60ページ～78ページ。

催されるようになるのはそのためだ。福岡市はアジアフォーカスにマーケットと賑わいを求めているのだ。

V アジアフォーカス・福岡国際映画祭2013年～2015年

アジアフォーカス2013年の概要は下記の通りである。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2013

会期：9月13日（金）～9月23日（月・祝）（11日間）

会場：キャナルシティ博多、ユナイテッド・シネマ キャナルシティ13、キャナルシティ劇場など

上映作品：23か国・地域から51作品（上映作品22作品、アジアフォーカス名監督特集イ・チャンドン全作品上映5本、1Q64～過去はいつも新しい～7本、香港映画大特集1本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2013 25,693人

協賛企画など 8,128人 合計 33,821人⁽²⁶⁾

観客数が突然増えたが、これは共催事業として開催された「テクネ 映像の教室展」や「世界のCM フェスティバル～福岡国際映画祭特別編～」などの観客数が含まれているからで、以後2019年まで色々なイベントが観客数に含まれるので、映画館の観客が増えたわけではないことに留意する必要がある。

この年は日本映画の特集「1Q64 ～過去はいつも新しい～」が開催され、『東京オリンピック』（1965年 市川崑監督）や『月曜日のユカ』（1964年 中平康監督）など7本の日本映画が上映される。タイトルは村上春樹の小説から取り、「東京オリンピック2020」開催決定を祝うものとなったが、「東京オリンピック2020」開催決定は2013年の9月7日なので、結果として時期をとらえた企画として成功となった。キャナルシティ13は上映設備がすべてDCP対応に変わっており、35ミリフィルムである古い日本映画は上映できないので、キャナルシティ劇場に35ミリ映写機を設置して上映される。日本映画の特集はその後も継続するが上映場所には苦心し、2014年は総合図書館、2015年から2017年まではキャナルシティに隣接する市の施設であるぼんプラザホールが使用される。

この年から「アジアマンス」は「アジアンパーティー」へと名前を変える。2013年のアジアフォーカスカタログの高島市長の「ごあいさつ」にこうある。

この度、「アジアマンス」は“アジアと創る”「アジアンパーティー」として生まれ変わります。20年以上継続してきた本映画祭、福岡アジア文化賞、アジア太平洋フェスティバルの主要事業にクリエイティブ関連イベントなどを加え、人々が集う華やかな社交

⁽²⁶⁾ 前掲「30年を振り返って 1991年～2020年上映作品一覧」、60ページ。

場をイメージした新しい魅力あふれるアジアンパーティを9月から10月にかけて開催します。福岡市は、アジアンパーティの展開とともに、今後の成長エンジンとして地域経済を牽引するクリエイティブ関連産業を盛り上げ、「クリエイティブ・エンターテインメント都市・ふくおか」の実現を目指します。⁽²⁷⁾

映画を上映しゲストを招いて国際交流を推進する、市民のアジア理解に貢献するだけではもはやアジアフォーカスは成立しない。アジアからの招待作品を上映する以外の様々な企画が事務局中心で推進されていく。協賛企画はしかたないとしても、アジアフォーカス実行委員会主催事業でも梁木ディレクターはその中心に存在しないことが増える。結果を報告されるだけだ。事務局主導でイベントが次々に進んでいく事態をディレクターの梁木氏はどう思っていたのだろうか。

アジアフォーカス2014年～2015年の概要は下記の通りである。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2014

会期：9月12日（金）～9月21日（日）（10日間）

会場：キャナルシティ博多、ユナイテッド・シネマ キャナルシティ13、福岡市総合図書館映像ホール・シネラ

上映作品：18か国・地域から39作品（上映作品15本、日本映画特集「しゃらくせえ絵師たち～浮世と絵と映画～」7本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2014 23,936人

協賛企画など 6,888人 合計 30,824人⁽²⁸⁾

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2015

会期：9月18日（金）～9月25日（金）（8日間）

会場：キャナルシティ博多、ユナイテッド・シネマ キャナルシティ13、ぽんプラザホール

上映作品：22か国・地域から45作品（上映作品15本、インドネシア大特集「マジック☆インドネシア」6本、日本映画特集「幻想の南洋」4本、ドキュメンタリー特集「アジア・リミックス」4本、特別上映1本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2015 31,005人

協賛企画など 8,041人 合計 39,046人⁽²⁹⁾

アジアフォーカスとしては待望の映画マーケットが2014年から始まる。「ネオ・シネマップ福岡」である。30周年記念誌のカタログには下記のように書いてある。

⁽²⁷⁾ 高島宗一郎「ごあいさつ」梁木靖弘／編（2014年）『第24回アジアフォーカス・福岡国際映画祭 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、2ページ。

⁽²⁸⁾ 前掲「30年を振り返って 1991年～2020年上映作品一覧」、62ページ。

⁽²⁹⁾ 同前、64ページ。

初の試みとして、商談会「ネオ・シネマップ福岡」を開催。韓国の映画製作会社によるプレゼンテーションを中心に、国内外の製作会社、配給会社が商談・情報交換を行った。韓国他から5社、日本配給会社12社、映画祭ゲスト多数が参加した。⁽³⁰⁾

もともとアジアフォーカスにはマーケットとしての機能はあったが、それをアジアフォーカスの事業として開催していたわけではない。各映画会社は来たい時に来ていただけだ。だから急にマーケットをやりますといっても、マーケットの日に映画会社に来るわけではない。1回目なので韓国の会社に絞り、招待することでマーケットを立ち上げたのだ。会場はキャナルシティ博多ビジネスセンタービルの会議室。元企画委員の高橋哲也氏がコーディネーターを務めた。映画祭ゲストもインディペンデント系の監督はプロデューサーを兼ねていることが多いので、空いた時間で参加をしてもらえる。ゲストにすれば福岡で商談がまとまれば来たかいがある。2015年からは三好剛平氏がコーディネーターとなり、福岡商工会議所の会議室や、国際会議場、西鉄インと会場を変えながら開催されていく。

新しいアジアパーティは福岡市の経済を牽引するものにならなければいけない。アジアフォーカスもそれに貢献するものでなければならない。アジア映画の最先端を探すという梁木氏の目指す映画祭像と、福岡市が考える映画祭像に齟齬が生じ始めている。

またこの頃アジアフォーカス上映作品がDCPというデジタルフォーマットに統一されていく。当初は大手の映画会社だけだったが、アジア全域のインディペンデント映画もDCPで映画を作るようになる。デジタル映画はインターネットと親和性が高い。VIMEOなどのネット経由で映画を見せてもらうことが普通になっていく。もしくはDVDを送ってもらう方法もある。梁木氏は次第に海外の映画祭に出かける必要がなくなる。映画選定に関わる経費が大きく削減されていく。これは私の個人的見解だが、外国には焦点を絞ってでも出かける必要はあると思う。それは行かねば分からないことが沢山あるからだ。情報を集め、見る努力をしなければ、良い映画は発見できない。インターネットは便利だが、何を検索するかは個人に任される。さらにはまだ発見されていない情報をいかに発見するか、情報が公開される前にいかに見つけるかが重要なのである。映画祭プログラマーに求められるのはそういった情報網だ。マーケットは情報収集の場としても機能する。私も映画祭会期中毎年1度はネオ・シネマップを見に行っていた。そこで得られる情報は膨大である。海外の映画祭でも上映プログラムを見るだけでなく、マーケットを覗くことで、上映されていない多くの映画の情報を得ることができる。実例を一つ紹介しよう。2016年に日本で公開された中国映画『ラサへの歩き方 祈りの2400km』（2015年 チャン・ヤン監督）について、映画のパンフレットに次のように書いてある。

この映画について初めて聞いたのは、2015年9月の福岡。アジアフォーカス福岡映画

⁽³⁰⁾ 同前、62ページ。

祭に、中国のワン・ビン監督作の制作や国際セールスとして旧知の会社が参加していて、そこでセラーをしている女性からだった。(略) 福岡に来ていたワン・シャオシェイ監督(あのすばらしき『北京の自転車』の監督)に映画の話をする、「チャン・ヤン(監督)はあの映画で化けた。すごい映画だよ。絶対見た方がいい」と言った。ますます期待が高まった。⁽³¹⁾

配給会社ムヴィオラは10月の釜山国際映画祭で映画を実際に見て配給を決断する。ネオ・シネマップでの情報収集がビジネスに結びついたのである。

2015年の映画界最大の話は、NETFLIXの配信が始まったことである。日本国内でもすでに他業者の映画配信事業は始まっていたが、NETFLIXはアメリカから来た黒船のごとくシェアを奪っていく。パソコンやスマホで映画を見ることができた時代が来ていた。シネマコンプレックスが始まった時と同じように、大きなシフトチェンジが起きようとしている。アジアフォーカスも無縁とは言えない。私は毎年総合図書館の仕事として、監督やプロデューサーと話をしてきたが、アジアフォーカスで上映されるインディペンデント系作品でさえ、NETFLIXが権利を獲得しているという事がおきる。こういう作品は収集できない場合が多い。そういう作品が年々増えていくのだ。

そして2015年から福岡市は、国際交流基金アジアセンターと共催でアジアフォーカスを開催する。「東京オリンピック2020」が決まったことで、政府は世界中との交流事業に力をいれる。アジアセンターは2014年にできた組織で、「日本を含むアジア地域に住む人々が、交流や協働作業を通じてお互いのことをよく知り合い、アジアとともに生きる隣人としての共感や共生の意識を育んでいくこと。」⁽³²⁾をミッションとしていた。事業は2020年までの限定で、東南アジアとの様々な交流事業を他の主催者と共催で開催するのだ。映画祭では東京国際映画祭や山形国際ドキュメンタリー映画祭も当然対象になる。

2014年にどのように協働するかが長く議論され、福岡市はアジアセンターと合意書を結び、アジアフォーカスと福岡アジア文化賞の事業を共催で行うことにする。アジアセンターの事業は2020年までと最初から決まっていたので、5年間事業を共催することが決まる。2015年のアジアフォーカス実行委員会予算は、アジアセンターや芸術文化振興基金の助成金も含めると、1億4千万円近くにまで膨らむ。だから2015年のアジアフォーカスは特集数が多い。インドネシア大特集「マジック☆インドネシア」から石井岳龍監督の新作までと多彩である。またフィルムコミッション主催で、2013年から始まった、地元クリエイターを支援する「福岡ワンミニット・フィルムコンペティション」はじめ協賛企画も多く、観

⁽³¹⁾「配給によせて」ムヴィオラ/編(2016)『ラサへの歩き方 祈りの2400km [映画パンフレット]』ムヴィオラ、14ページ。文中のワン・シャオシェイ監督は2015年『赤い季節の忘却』という映画でアジアフォーカスに参加していた。

⁽³²⁾国際交流基金アジアセンターが設立当時配布した、組織の設立の紹介する資料『文化のWA(和・環・輪)プロジェクト〜知り合うアジア〜』から引用。

客からすればもはや全体を把握することが困難な状況である。

VI アジアフォーカス・福岡国際映画祭2016年～2019年

アジアフォーカス2016年から2019年までの概要は下記の通りである。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2016

会期：9月15日（木）～9月25日（金）（11日間）

会場：キャナルシティ博多、ユナイテッド・シネマ キャナルシティ13、ぽんプラザホール

上映作品：23か国・地域から55作品（上映作品17本、ベトナム大特集「ベトナム進化系～ベトナム映画に何が起きているのか？」7本、日本映画特集「つかこうへい VS 映画～そこに映画があった～」4本、ドキュメンタリー映画特集「アジア・リミックス」4本、特別上映3本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2016 21,861人

協賛企画など 18,425人 合計 40,286人⁽³³⁾

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2017

会期：9月15日（金）～9月24日（日）（10日間）

会場：キャナルシティ博多、ユナイテッド・シネマ キャナルシティ13、ぽんプラザホール

上映作品：22か国・地域から63作品（上映作品15本、タイ映画大特集「映画（エ）の美味（ビ）でタイを釣る」7本、日本映画特集新作『花筐／HANAGATAMI』のための大林宣彦監督作品集3本、ドキュメンタリー特集上映「アジア・リミックス」3本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2017 20,485人

協賛企画など 15,068人 合計 35,553人⁽³⁴⁾

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2018

会期：9月14日（金）～9月23日（日）（10日間）

会場：キャナルシティ博多、ユナイテッド・シネマ キャナルシティ13

上映作品：23か国・地域から56作品（上映作品15本、フィリピン映画特集「聖なるカオスに魅せられて」4本、日本映画特集「壊れものとしての家族」5本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2018 20,369人

協賛企画など 14,088人 合計 34,457人⁽³⁵⁾

⁽³³⁾ 前掲「30年を振り返って 1991年～2020年上映作品一覧」、66ページ。

⁽³⁴⁾ 同前、68ページ。

⁽³⁵⁾ 同前、70ページ。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2019

会期：9月13日（金）～9月19日（木）（7日間）

会場：キャナルシティ博多、ユナイテッド・シネマキャナルシティ13

上映作品：20か国・地域から61作品（上映作品12本、東南アジア・リージョナル特集3本、チャン・リュル監督特集「越境するポエジー」3本、日本映画特集「モダニズムへの愛と憎しみと監督・蔵原惟繕」3本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2019 22,584人

協賛企画など 8,899人 合計 31,483人⁽³⁶⁾

公式記録上は2016年の40,286人がアジアフォーカス観客数の最高値になる。アジアセンターとの事業も2016年はベトナム映画特集「ベトナム進化系～ベトナム映画に何が起きているのか?」。2017年はタイ映画特集「映画（エ）の美味（ビ）でタイを釣る」、2018年はフィリピン映画特集「聖なるカオスに魅せられて」、2019年には「東南アジア・リージョナル特集」でインドネシアとタイの映画を上映している。どの国もインディペンデント系の映画が多く上映され、アジアフォーカスが始まった頃の1990年代とは各国の状況がまるで違うことが理解できた。インドネシアからはダンスパフォーマンスのグループが招聘されるなどゲストが増えて、シンポジウムや、若手作家を対象にしたワークショップなど、映画上映以外でも多彩なプログラムになる。

アジアセンターが共催となり予算的な心配がないようにも思えるが、福岡市もアジアセンターも年々少しずつ予算を削減しており、2019年段階でのアジアフォーカス実行委員会予算は2014年とほぼ同額となる。関連上映企画のプログラムが増えた分、新作のアジア映画に使える予算は少なくなる。2016年の新作アジア映画の上映本数は31本あるが、2019年には18本にまで減少する。2019年の18本には総合図書館収蔵作品が2本含まれている。

この時期の特筆は、チャン・リュル監督が福岡市内で撮影した映画『福岡』（2019年 韓国）の公開だろう。チャン・リュル監督は何度か福岡の映画祭に参加し、梁木ディレクターとの友情関係や、フィルムコミッションの協力で『福岡』は完成する。2018年に撮影され、その年のアジアフォーカスで初公開予定だったが、完成が遅れ、ベルリン映画祭で世界初公開された後、2019年のアジアフォーカスで上映された。

この頃海外の映画祭に行っても良質な作品を見つけることが難しくなった、質量ともにアジア映画が衰退していると感じる梁木ディレクターは、2019年のカタログに映画の映画製作に新しい方向性があると書く。

これまで映画のリング・フランカ（共通言語）だったと思われる表現形式が腐食しているのではないか。たとえば、物語はヒューマニズムをベースにしている。物語の起承転結は誰にでもわかる。スクリーンで起きていることは、理性の枠組みのなかで

⁽³⁶⁾ 同前、72ページ。

ほぼ理解は可能である。こうした前提が機能しなくなっている、そんな印象なのです。映画の領分は、テーマやメッセージ（これはネット社会のデマゴギーにすぎなくなりました）ではなく、映画の概念（あるいは世界の概念）が揺らいでいることをいかに示せるか、というところにあるのではないのでしょうか。たとえば、今年のオープニング作品、チャン・リュル監督の『福岡』ですが、これもそうした輪郭の曖昧さにかかわる作品だということがいえます。チャン・リュル監督と福岡市は10年かけて深い絆を作ってきました。その結果、監督のもつポエジーと福岡という土地が一体化した見事な映画になりました。これは、映画祭、フィルムコミッション、ボランティアの方々そのほか、福岡市が前面的にバックアップして作り上げた作品です。（略）この作品が、今後のアジアフォーカスの方向性を示すモデルケースになるかと思います。つまり、福岡というリージョナルの場と、映画の最先端の表現との結びつき。この二つが今後の映画祭の新たな方向性ではないかと思えます。⁽³⁷⁾

『福岡』への製作協力がアジアフォーカスの評価に大きく貢献したのかどうか、私には不明だ。梁木氏の映画に対する表現は以前より難しくなっているのではないだろうか。どんな映画が選定されるのか、読んだだけでは分かりにくい。併せて30周年記念誌での2018年と2019年のアジアフォーカスについて記した冒頭の文を併記する。

選定にあたっては、多様な文化を紹介するため一国一作品を基準としてきたが、この年から作品本意で選定することにした。背景には、良質なアジア映画の減少傾向がある。その結果、タイ、マレーシア、台湾から2作品ずつ公式招待することとなった。アジア各国の映画製作が減少することへの懸念は、シンポジウムのテーマとなった。（2018年 30周年記念誌）⁽³⁸⁾

様々なスタイルの映画を選定するようにしているが、この年は、世界的な行き詰まりを反映してか、後味の苦い作品が目立った。そうした中で、独自の文化圏を持つ「リージョナル」な場と、鋭いセンスの映画表現が結びついた秀作が揃った。（2019年 30周年記念誌）⁽³⁹⁾

このころ梁木ディレクターの元気が次第になくなっていくように私は感じていた。大学教授とディレクターの両立を頑張っておられたが、60歳を過ぎ年齢的にもきついとこぼされる時があった。また少し前から大学の授業も規定の授業回数をこなすことが、文部科学

⁽³⁷⁾ 梁木靖弘「今年のみどころ」梁木靖弘／編（2019）『アジアフォーカス・福岡国際映画祭2019 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、13ページ。

⁽³⁸⁾ 前掲「30年を振り返って 1991年～2020年上映作品一覧」、70ページ。

⁽³⁹⁾ 同前、72ページ。

省により義務づけられていた。ゆとり教育への反省なのか、休講した場合は後日授業を行わねばならない。大学で授業を持ち、アジアフォーカス会期中は現場につきっきりになる。梁木氏は授業ができない時には別の先生に授業を頼むなどされていた。選定作品は物語的にはすっきりとしない曖昧な映画が増えていく。それは一般の観客にはうれしいことではない。好き嫌いははっきり分かれるからだ。

梁木氏が言う、福岡で最先端の表現者が作品を作るというのは、美術館のアーティスト・イン・レジデンスに近い考え方もかもしれない。チャン・リュル監督は福岡市の映画製作に対するバックアップに、「福岡市には大変感謝したい」と謝辞を述べている。しかしアジアフォーカス実行委員会も福岡市も映画製作の資金援助はしなかった。チャン・リュル監督は世界のあちこちで映画を作ってきたが、地元から資金援助がなかったのは『福岡』が初めてだと語っていた。⁽⁴⁰⁾ チャン・リュル監督は中国の映画会社の担当者と来日していたが、『福岡』は日本でロケしたことで、韓国国内では反日運動の盛り上がりのため上映できず、製作資金の回収ができないと必死に日本の配給会社への売り込みをしていた。この時のネオ・シネマップでは商談はまとまらなかったが、最終的には日本での上映が決まった。安心したのは監督だけではないだろう。減少していく予算の中でアジアフォーカスをどうするかの開策が、予算を使わずにアジアの監督が福岡で映画製作をすることだったのだろうか。

関連企画について少し書いておきたい。関連企画は2015年まで協賛企画と表記されていたが、2016年から関連企画と称される。単なる名称の変更でこれにより内容が変化するわけではない。クリエイティブな都市、若手の育成という意味では、フィルムコミッション主催の「福岡ワンミニット・フィルムコンペティション」が2013年に始まる。福岡をテーマに1分の映像を作って、審査員が審査する。このコンペティションは2015年まで続く。2016年からクリエイティブ関連産業振興事業「福岡パノラマ」が始まり、2020年まで継続する。福岡パノラマは、アジアフォーカスでモデレーターや、作品選定等で協力していた西谷郁氏の立案で、福岡で活躍する映画、映像、アニメなどのクリエイターを紹介、支援する目的で開催された。福岡の若手クリエイターの作品を映画祭の1プログラムとして上映したのだ。それ以外にも、福岡の映像制作者が、アジアフォーカスで来日した監督たちと行ったワークショップ「Fukuoka Film Forum」(2017年)や、福岡アジア文化賞とアジアセンターにより行われた、福岡アジア文化賞を受賞したタイのアピチャッポン・ウィーラセタクン監督と開催したワークショップ「天神アピチャッポン・プロジェクト」(2016年)など、バラエティにとんだ若手育成プロジェクトが開催された。こういった若手作家や、フィルムコミッション支援作品を一堂に見ることができる場所は、年に一度でよいのでどこかにあっても良いだろう。アジアフォーカスがあったからこそ福岡の映像作家たちがここまで発展したとも言える。彼ら若手作家たちは、アジアの監督たちが福岡で撮影すると

⁽⁴⁰⁾ 筆者がアジアフォーカス会期中にチャン・リュル監督から直接聞いた事。

きのスタッフとして機能する。フィルムコミッションとしては強力な援軍となる。

関連企画でもう一つ。2016年と2017年に「レストレーション・アジア」が開催された。2016年は総合図書館で、2017年はユナイテッドシネマ キャナルシティ13が会場である。主催者のエイドリアン・ウッド氏は、IOCの委託でオリンピック映画の修復を担当した国際的に知られるイギリス人のアーキビスト。トランジットで偶然立ち寄った福岡市が気に入り、奥さんが日本人だったこともあり、福岡市に2015年から居を構えていた。レストレーション・アジアは映画の保存と修復に関するワークショップである。かなり玄人好みのワークショップだが、2016年の総合図書館での開催には、東アジアや東京から多くのアーキビストが集まってくれた。

数多くの協賛、関連企画がアジアフォーカスを中心に開催され、多くの実績を残した。しかしアジアフォーカスはこれらの事業に多くの予算はさけない。事業の主催者たちの努力の賜物ではないだろうか。

Ⅶ アジアフォーカス・福岡国際映画祭2020年～アジアフォーカスの終わり

アジアフォーカスとアジアセンターとの共催は2019年で終わる。オリンピックが2021年に延期になったことで、アジアセンターは活動を継続し、主に東京国際映画祭との共催プロジェクトや各種事業への補助金支給が行われる。福岡市には中国から大型のクルーズ船が来るようになった。韓国やベトナムなどからも多くの人ややってくる。もはやアジアをキーワードとした街づくりの時代ではない。福岡市をアジアに積極的にアピールする必要はなく、自然にアジアとの協働が生まれている。だから福岡市の行政としては、もはや大きな予算をかけてアジアフォーカスを主催する必要はなくなった。当初の目的を達成したという判断である。温暖化による台風や豪雨災害、少子高齢化による社会保障の増大など対策が迫られる課題は山ほどある。市民が安心・安全に暮らせる街づくりが求められていた。⁽⁴¹⁾ そういった課題を解決するためにも経済発展は欠かせない。2014年に始まった福岡経済の浮沈を握る「天神ビッグバン」も、福岡市が取り組むのは規制緩和や事業者同士の情報交換など予算を少ししか使わない取り組みである。主体はあくまで民間となる。2019年のアジアフォーカスの後福岡市は、アジアフォーカス開催は2020年を最後とし、その後は関連企画等の民間映画祭に任せて、それを支援する方針に転換することを決める。つまりアジアフォーカス開催の主催者であるアジアフォーカス実行委員会が、2021年3月をもって解散することが確実となったのである。2020年のアジアフォーカスの概要は下記の通りである。

⁽⁴¹⁾ 福岡市総務企画局企画調整部 / 編 (2017) 『政策推進プラン (第9次福岡市基本計画 第2次実施計画)』の冒頭において高島市長は「今後も、経済的な成長と安全・安心で質の高い暮らしのバランスがとれたコンパクトで持続可能な都市として、「人と環境と都市活力の調和がとれたアジアのリーダー都市」をめざし、福岡市を次のステージに飛躍させるチャレンジを進めてまいります。」と記している。

アジアフォーカス・福岡国際映画祭2020

会期：9月20日（日）～9月24日（木）（5日間）

会場：キャナルシティ博多、ユナイテッド・シネマ キャナルシティ13、マリンメッセ福岡第2駐車場

上映作品：22か国・地域から59作品（上映作品8本、アノーチャ・スウィチャーゴーンポン監督特集10本、日本映画特集 芦川いづみ特集4本、オープニング上映1本）

観客数：アジアフォーカス・福岡国際映画祭2020 8,487人

関連事業 3,841人 合計 12,328人⁽⁴²⁾

2020年に関しては新型コロナウイルスの感染拡大のため、開催自体が危ぶまれた。公的機関の多くは休館となり、開催自体がぎりぎりの判断だったと思う。1観客としては、ゲストが誰も来ることができなくても、開催されて良かったと思う。オープニングはチャン・リュル監督の『福岡』のモノクロバージョン。アジア映画の上映作品は19本だが、うち7本は短編なので、長編に換算すると13本相当となる。特集はタイの「アノーチャ・スウィチャーゴーンポン監督特集」である。梁木ディレクター好みの企画で、アノーチャ監督は次の福岡市で映画製作をする監督の候補だったのかもしれない。マリンメッセ福岡第2駐車場では野外上映が行われた。アジアフォーカスでは野外上映は珍しい試みである。

この年関連企画として行われた「福岡インディペンデント映画祭」、「台湾映画祭」、「福岡アジアフィルムフェスティバル」の3企画と、翌年に三好剛平氏が主催した「ASIA FILM JOINT」が、2021年10月～11月に福岡市が支援する民間映画祭として開催された。

最後のアジアフォーカス実行委員会総会資料に、今後について下記のように書かれている。

情報通信技術の発達や交通手段の発達等によって、アジアに関する情報入手が容易となるとともに、民間映画祭も多数開催されるようになったことで、映画を通してアジアに対する理解を深め、市民レベルでの国際交流を推進していくことを目的に設立された当映画祭は、当初の役割を果たしたものと考えます。なお、新型コロナウイルス感染症により大きな影響を受けている民間映画祭の支援が必要であることから、これまで映画祭が築いてきた人的ネットワーク及び開催ノウハウ等を民間事業者及び団体へ引継ぎ、民間主導の実施となるよう支援を行政が行ってまいります。⁽⁴³⁾

残念なのは、関係者への実行委員会解散の通知が、2021年3月の実行委員会での委員に

⁽⁴²⁾ 前掲「30年を振り返って 1991年～2020年上映作品一覧」、74ページ。

⁽⁴³⁾ 「アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会の解散について」アジアフォーカス・福岡国際映画祭事務局/編（2021）『令和2年度アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会総会』アジアフォーカス・福岡国際映画祭事務局、8ページ。

よる解散承認の後になったことだ。行政としては委員会の正式決定前に公表することはできない。しかし多くの関係者が支えていた事業であり、3月の告知は遅かったと言わざるをえない。西日本新聞が3月11日の紙面でアジアフォーカスの終わりをいち早くスクープして、市民の知るところとなった。⁽⁴⁴⁾ これは推測だが、梁木ディレクター自身も実行委員会のメンバーとしてこの時初めてアジアフォーカスの終了を知ったのではないだろうか。ショックを受けた関係者は多い。そしてアジアフォーカスの担当部署は4月になくなる。アジアフォーカスの遺産は市民の中と、総合図書館に残され、2021年4月から総合図書館が収蔵するアジア映画を対外的に貸し出す事業が始まる。アジアフォーカスの事務局はなくなったが、コンテンツ振興課による民間映画祭を支援する仕組みは残った。⁽⁴⁵⁾ フィルムコミッションと総合図書館はまだ健在。3者の取り組みが今後も続いていく。

もし、東京オリンピックが開催されず、アジアセンターとの共催事業にならなければ、アジアフォーカスは1～2年早く終わっていたかもしれないと思うのは私だけだろうか。アジアフォーカスを継続する方法はあっただろうか。ディレクターの交代も選択肢だったかもしれない。しかしそれでもアジアフォーカスの実行委員会は大きすぎた。芸術・文化の交流事業としてだけなら市長が名誉会長を務める必要はないし、福岡市の大企業が数多く委員になる必要もない。実行委員会のスケールを落として、継続するというのも一つの方法だったかもしれない。いずれにせよアジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会が一度解散しなければ、次に進むことはできなかったと思う。

もともと、西日本新聞社がアジア太平洋博覧会の関連事業として考え、福岡市がアジアマンスの中で大きく発展させ、街づくりに活用されてきたアジアフォーカスは、当初は人材の多くを東京に頼っていたが、次第に福岡の人材で大部分を行えるようになった。福岡市民による民間映画祭も多数誕生し、行政が中心的存在であり続ける必要はなくなった。後は行政は市民を支援すればよい。だから福岡アジア映画祭として始まった映画祭は、名前を変え、再び民間へ戻され、今後も続いていく。人材やノウハウを含めたアジアフォーカスの遺産の活用。それは市民に託されているのだ。

おわりに

映画祭は様々なイベントが同時に起きるものだ。本稿ではアジアフォーカスで上映された個々の映画やゲストについてはほとんど言及しなかった。映画祭の立ち上がりから、終わりまでを時系列的に理解することが目的だからだ。またディレクター以外のスタッフも沢山いる。特にアジアフォーカスは、市の中に事務局を持ち、職員と嘱託で運営した。映画祭担当職員は在課年数が長い人が多いのも特徴だった。嘱託も同じ人が長く働いている。対外的な交渉や広報などは嘱託職員に委ねられていた。市の外部も字幕制作や、翻訳者、

⁽⁴⁴⁾ 「福岡国際映画祭30回で幕」『西日本新聞』、2021年3月11日、朝刊、30ページ。

⁽⁴⁵⁾ ただし支援がずっと継続するかは不透明である。

通訳、会場運営と多くの人が関わり、皆それぞれに語れる物語がある。沢山開催された関連企画も詳細はどこかで記録をまとめるべきだろう。

本稿を書きながら、やっと30年間のアジアフォーカスの始まりから終わりまでを整理することができた。4人の市長、2人のディレクター、30年間の時間の中で福岡市も映画業界も大きく変わった。社会が変われば行政も変わる。そういう意味では行政は生き物だ。行政と協働する以上は、今のこの環境に適応するにはどうするかを考えなければいけない。

2022年3月17日、佐藤忠男氏が亡くなった。私が最後に会ったのは2019年の12月だ。老人ホームで足を引きずるように歩きながら、今書こうとしている本について話し、総合図書館にまた映画を見に行くと言われた。アジアフォーカスについては「ディレクターができて、あの時は楽しかった。」と語ってくれた。アジアフォーカスについてインタビューをしたわけではない。ふいに自分から話してくれたのだ。佐藤氏の著書『知られざる映画を求めて』の最後にこう書いてある。

〈知られざる映画〉を知ろうとすると多くの人に助けていただくことになり、また助けをあげることにもなる。そこから生じる多くの人々との友情こそがなよりの報酬である。⁽⁴⁶⁾

佐藤氏はディレクターをしながら本当に映画人との交流を楽しんでいたのだ。梁木氏もディレクター就任2年目から、アジアフォーカス会期中、監督等のゲストと個別に会談時間を設けていた。最後は梁木氏にとって残念な形で終わったように思うが、アジアフォーカスが梁木氏にとってどのような存在だったのか、ゲストとどのような会話が交わされたのか、いずれ本人が書かれることだろう。⁽⁴⁷⁾ アジアフォーカスはディレクターだけではなく、多くの人に様々な思いを残した。私の個人的な感想を言わせていただければ、「すごく忙しくて大変だった。でもそれ以上に楽しかった。」かもしれない。アジアフォーカスの記憶は、宝物のように残っている。最後に本稿執筆にあたり、個別にインタビューに応じてくれた間ふさ子氏、北田義徳氏、高橋哲也氏、西谷郁氏、萩尾雅典氏、前田秀一郎氏、山口吉則氏（アイウエオ順）には感謝の他ない。この場を借りてお礼を申し上げたい。またアジア映画について多くを教えていただいた佐藤忠男、佐藤久子⁽⁴⁸⁾両氏に追悼の意を捧げて本稿の終わりとする。

参考文献

- ・ 梁木靖弘 / 編 (2007) 『アジアフォーカス・福岡国際映画祭2007 [公式カタログ]』 アジアフォーカス・

⁽⁴⁶⁾ 佐藤忠男 (1999) 『知られざる映画を求めて』 現代書館、294ページ。

⁽⁴⁷⁾ 梁木氏にもインタビューを申し込んだが、残念ながら受け取ってもらえなかった。話をするためには時間が必要なのかもしれない。

⁽⁴⁸⁾ 佐藤久子氏は2019年9月9日に亡くなられている。

福岡国際映画祭実行委員会

- ・ 梁木靖弘 / 編（2010）『第20回アジアフォーカス・福岡国際映画祭 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会
- ・ 梁木靖弘 / 編（2012）『第22回アジアフォーカス・福岡国際映画祭 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会
- ・ 梁木靖弘 / 編（2014）『第24回アジアフォーカス・福岡国際映画祭 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会
- ・ 梁木靖弘 / 編（2019）『アジアフォーカス・福岡国際映画祭2019 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会
- ・ 梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・高見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳 / 編（2021）『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991-2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会
- ・ 佐藤忠男（1999）『知られざる映画を求めて』現代書館
- ・ 福岡市総務企画局企画調整部 / 編（2013）『政策推進プラン（第9次福岡市基本計画 第1次実施計画）』福岡市総務企画局企画調整部
- ・ 福岡市総務企画局企画調整部 / 編（2017）『政策推進プラン（第9次福岡市基本計画 第2次実施計画）』福岡市総務企画局企画調整部
- ・ ムヴィオラ / 編（2016）『ラサへの歩き方 祈りの2400km [映画パンフレット]』ムヴィオラ
- ・ 村山匡一郎・出口丈人 / 編（1995）『CINEMA 101 創刊号』映像文化連絡協議会

2023年度学会活動

1. 2023年度 第33回大会

日 時：2023年5月27日（土） 9：00～17：30

場 所：福岡女子大学 C101教室

〈自由論題〉（9：00～11：50）

座長 猿渡 剛氏（下関市立大学）

第1報告

「カンボジアのキャッサバ輸出拡大―農産物加工業の国際分業構造に着目して―」

報告者：劉 澤文氏（九州大学大学院博士後期課程）

第2報告

「アフターコロナの総合商社論」

報告者：野田雄司氏（西南学院大学大学院博士研究員）

第3報告

「日本における地域交通の統合的政策の意味に関する一考察」

報告者：魏 蜀楠氏（長崎県立大学地域創造学部実践経済学科講師）

第4報告

「公共部門におけるカスタマーハラスメント」

報告者：鄭 ハナ氏（福岡県地方自治研究所研究員）

〔東アジアにおける女性の社会進出の現状と課題〕 14：10～17：30

会長挨拶 小川雄平氏

座 長 宮崎聖子氏（福岡女子大学）

第1報告

「「女性」という視点で見る東アジアの女性」

報告者：神崎智子氏（福岡県男女共同参画センター「あすばる」センター長）

第2報告

「フィリピンの民主主義と女性の参画」

報告者：山根健至氏（福岡女子大学）

第3報告

「インドネシアにおける女性ビジネスリーダー」

報告者：小西 鉄氏（福岡女子大学）

2. 定例研究会

第95回定例研究会

日 時：2023年4月1日（土） 14：30～17：45

場 所：西南学院大学 西南コミュニティセンター 会議室

第1報告

「JRになって35年・軌道修正の時－国の視点、九州の視点から」

報告者：石井幸孝氏（JR九州初代社長・会長）

第2報告

「東北アジアの緊張緩和を考える－越境地域経済協力の可能性」

報告者：小川雄平氏（九州情報大学大学院研究科長、西南学院大学名誉教授）

第96回定例研究会

日 時：2023年9月30日（土）13：30～17：30

場 所：西南学院大学 西南コミュニティセンター 会議室

第1報告

「近代国家と文化侵略－朝鮮半島における「国語」政策をめぐって－」

報告者：中島和男氏（西南学院大学名誉教授）

第2報告

「日韓国際結婚家庭親子の言語とアイデンティティ－留学経験と移動の経験を持つ家族の事例を通して－」

報告者：梁 正善氏（西南学院大学非常勤講師）

第3報告

「儀礼における民間信仰の実践とアイデンティティに関する考察－雲南省摩梭（モソ）人の「成丁礼」を中心に－」

報告者：金縄初美氏（西南学院大学国際文化学部教授）

第97回定例研究会

日 時：2023年12月9日（土）13：20～17：15

場 所：西南学院大学 学術研究所 大会議室

第1セッション 日中の企業間協力・地域間協力

座長：猿渡 剛氏（下関市立大学教授）

第1報告

「日中企業のSDGs協力の展望とその影響」

報告者：李 紅梅氏（吉林大学東北亜学院・研究院副教授）

第2報告

「新時代下中国東北地域の高次対外開放の主要任務と行動」

報告者：崔 健氏（吉林大学東北亜学院・研究院副院長・教授）

第2セッション RCEP 経済圏と日中経済

座長：王 忠毅氏（西南学院大学教授）

第3報告

「RCEP 加盟国の中国製品市場への依存度の変遷、影響及び傾向」

報告者：陳 志恒 氏（吉林大学東北亜学院・研究院教授）

第4報告

「RCEP 経済圏の日中製品市場への依存度の変遷とその影響」

報告者：龐 徳良 氏（吉林大学東北亜学院・研究院教授）

討論

総括コメント コメントーター：小川雄平 氏（学会長・九州情報大学教授）

【通訳】李 紅梅 氏、王 忠毅 氏

第98回定例研究会

日 時：2024年1月27日（土）14：30～17：45

場 所：西南学院大学 西南コミュニティーセンター 会議室

第1報告

「比較社会的観点から見る日本の「孤独死現象」：いくつかの論点と仮説」

報告者：呉 獨立 氏（九州大学韓国研究センター）

第2報告

「韓国の在日同胞政策 — 李承晩政府による国民統合の試みと限界」

報告者：緒方義広 氏（福岡大学人文学部）

3. 日台共催シンポジウム「日台の新たな未来関係を目指して」

共催者：

日本側：東アジア学会

台湾側：東呉大学商学院・法学院・東アジア地域発展研究センター・WTO 法律研究センター

日時：2024年3月7日（木） 9：30～17：10 場所：東呉大学（台湾台北市）

2024年3月8日（金） エクスカーション

研究発表

全体司会：柯 瓊鳳 氏（東呉大学）、王 忠毅 氏（西南学院大学）

〈午前〉9：30～12：00

開会の挨拶

東呉大学：詹 乾隆 氏

東アジア学会会長：小川雄平 氏（九州情報大学教授・西南学院大学名誉教授）

研究発表

(1) 政治部会

司会：木村 貴 氏（福岡女子大学）

1. 「習近平政権における党と国家の機構改革」

報告者：渡辺直土 氏（熊本大学）

評論者：黄 鼎軒 氏（東呉大学）

2. 「日台性犯罪規定の比較 — 日本における不同意性交罪の法改正から」

報告者：洪 兆承 氏（東呉大学）

評論者：緒方義広 氏（福岡大学）

〈午後〉 13：00～17：10

(2) 経済部会

司会：傅 祖壇 氏（東呉大学）

1. 「ポストコロナの中小企業金融支援」

報告者：西田顕生 氏（西南学院大学）

評論者：高山浩二 氏（西南学院大学）

2. 「台湾半導体産業の競争戦略と取引コスト」

報告者：柯 瓊鳳 氏（東呉大学）

評論者：阮 金祥 氏（東呉大学）

(3) 文化部会

司会：西谷 郁 氏（福岡インディペンデント映画祭）

1. 「日本における中国語教育のこれから — オンライン教材開発を端緒として」

報告者：荒木雪葉 氏（福岡大学）

評論者：有働彰子 氏（西南学院大学）

2. 「日台青少年交流事業の現状と課題」

報告者：羅 濟立 氏（東呉大学）

評論者：王 世和 氏（東呉大学）



CAMPUS
SUPPORT
SEINAN



印刷全般

(学術書、学会機関誌・ポスター・チラシ、日英翻訳出版、テキスト、名刺等)

翻訳 (日↔英)

(翻訳全般、教育プログラム等)

西南学院オリジナルグッズ販売

(ボールペン、ポーチ、扇子、西南チロリアン、セナフィー等)

生花販売、保険代理事業等



株式会社キャンパスサポート西南は
東アジア学会を全面的にサポート。



学校法人 西南学院グループ

株式会社 キャンパスサポート西南

福岡市早良区百道1丁目14-29

TEL.092-823-3576 FAX.092-823-3590

URL <http://www.cs-seinan.co.jp>



編集後記

『東アジア研究』第32号をお届けします。

今号は査読済みの論文と研究ノート各1本ずつ、研究資料1本、計3本を掲載しています。小平沙紀会員の論文は、現代韓国社会における男性の美容に関する意欲的な論考です。周亜芸会員の研究ノートは、日本在住の元留守児童についてのケーススタディです。八尋義幸会員の研究資料は第31号に掲載された研究資料の後編で、前号に続き、福岡で開催されていた映画祭の内幕を知ることができる貴重な資料です。いずれも興味深い文章ですので、ぜひご一読ください。また、お忙しい中にも関わらず査読をお引き受けくださった先生方、誠にありがとうございました。

今号から猿渡会員が新たに編集委員に加わることになりました。今後も紙面の充実に努めて参ります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(編集担当：荒木雪葉、猿渡 剛、山田良介)

東アジア研究 (東アジア学会機関誌) 第32号

発行日：2024年3月

発行：東アジア学会

事務局：〒814-8511

福岡市早良区西新6丁目2番92号

西南学院大学 学術研究所 藤川研究室内

TEL：(092)823-4227 (代表)

E-mail：eastasianstudies2020@gmail.com

※本書の無断転載は難くお断りいたします。

予め学会事務局あて許諾を求めてください。



East Asian Studies
vol.32 2024 March

Beauty Practice of Korean Males as “Spec” Reflecting Self-Management:
A Qualitative Analysis of the Theory of Vocabularies of Motive.....**KOHIRA Saki**

The Perceptions and Impact of Past Experiences as a Left-Behind Child:
The Life Story of a Former Left-Behind Child Living in Japan **ZHOU Yayun**

The festival of movies will not ends:
From 2006 to the End of the Focus on
Asia Fukuoka International Film Festival **YAHIRO Yoshiyuki**

Year 2023 Activity Report